北支

現地編輯

山西省特輯

4

10

山西省

地勢

大體方形に近い山西省は華北の平原から大行構造線で東を劃されながら、可なり急に隆起してゐて、全省を一つの大高原と見ることが出來る。概して北の方が高く、南する程低くなるが、これを仔細に見れば、實に多樣の起伏があつて、日本で言ふ北上山脈や木曾山

階段耕地

脈級の山脈は幾つも走つて居り、その間には越後平野や筑紫平野など位の盆地、河谷が亦幾つも數へられる

大體地體構造や地形から見ると內長城線附近から北の北支連脈區、同蒲線の通る中央地溝帶とも言ふべき縱谷列から西の西部山地區、縱谷列の東で石太線以北の五臺繋舟區、石太線以南の南東部山地區、その西南に續く西南角、といふ風に大體五つの區域に分けることが出來る

更に山西の山は六七割が厚い石灰岩から成り特有の崖壁を曝け出してゐる。そしてその間に石炭紀や中生代の紅色岩層が赤つぽい色を點綴せしめる、これはその近くに石炭や鐵の埋藏を暗示するものである

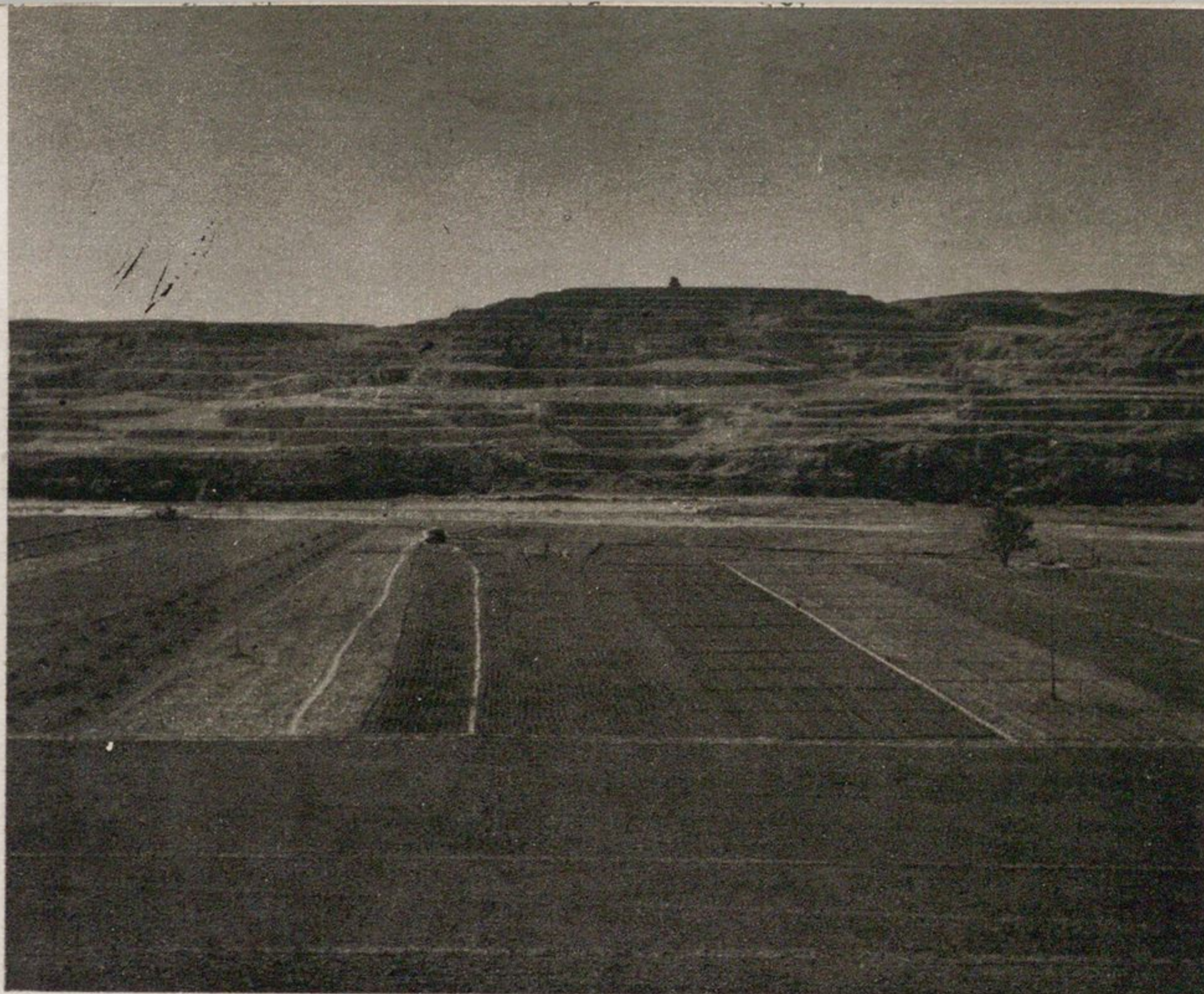
併し何と言つてもそれ等の山麓から盆地にかけて堆積する赤色土層と黄土の廣がりは更に山西高原の特相であると言はねばならぬ。黄土は北方程白つぽく南するにつれ黄灰色の濃さを增す、そして赤色土層はその下に顏を出してゐるが、南方では黄土の色よりも却つて、その赤褐色が風景の色調の有力なものになつて來る

斯かる新生代土層の厚い堆積こそは山國の山西に古代文化は勿論現代に見る土地の豐な生產力を與へたものである

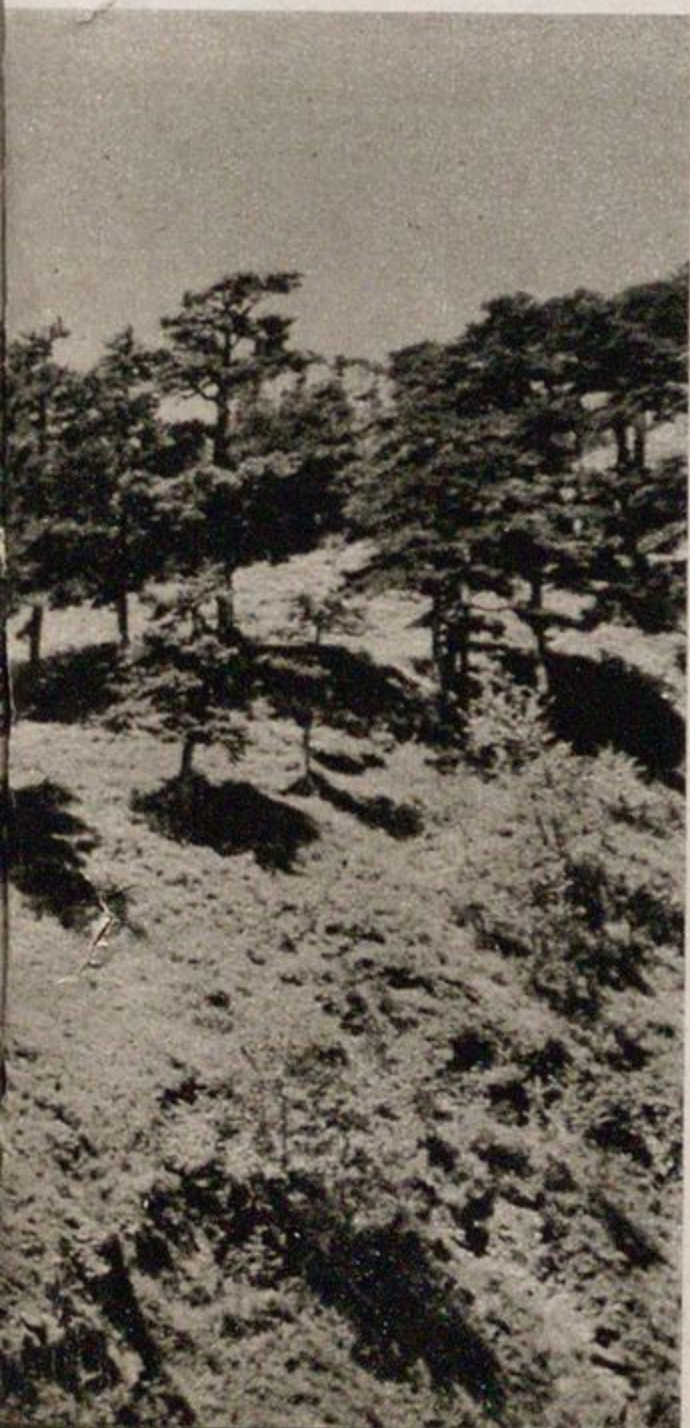
黄土の雨水による浸蝕

山西省

汾河・溪谷植物景觀

支那大陸はエングラー、ドルデー、ウイリス、中井の諸氏によつて植物地理區を論ぜられてゐるのであるが、未だ決定的なものでない。便宜的に蒙古地區、北支那地區、中支那地區、南支那地區に五大別される。北支那地區は河北、河南、山東、山西、陝西、甘肅の六省が之に屬し、更に此の地區は山東地區、平原地區、西部高臺地區の三部に區分される。山西省は氣候溫帶的で且つ乾燥し、高度三、五〇〇米以上もある五臺山を主峰とする大行山脈は山西を南北に縦走し一般に一〇〇〇米以上の高地である。北は寒冷寡雨の蒙古地帶に近接し、南は溫暖多雨な中支に、東

黄土地帶を流れる汾河の河床

大行山脈中の溪谷の一景觀

高山地方には松・落葉松・雲杉の大森林が存在する（五臺、寧武地方）

二百餘種の高山植物が爛漫と咲き亂れる五臺山望海峰の御花畠

は高原性の陝西甘肅に、尙ほ西は河北平原に接續してゐる。斯様な地勢、氣候に左右されてゐる山西省の植物は山西特有の「フロラ」を構成してゐるのである。裸子植物は中部や南部に比して著しく僅少で單に、イテフ、イヌガヤ、イチヰ、マツ、カラマツ、タウヒ、モミ、ビヤクシン、コノテガシワ、マワウ等の諸屬であり、被子植物ではヤナギ、クルミ、カバノキ、ニレ、クワ等の諸科が多數生育し、尙ほ高地にはツツジ屬が數種存在する。要するに山西の樹木は夏綠濶葉樹林にして常綠濶葉樹はない。尙ほ五臺山等には、松、落葉松、雲杉等の大針葉樹林が存在することは頗る注目すべきである。草本類は極めて豐富で河北平原に最普通な植物が侵入すると共に、五臺山等では、山東地區、平原地區等に分布しない四百餘種の植物が七、八月頃、一時に百花爛漫の御花畑を構成することは山西省特有の植物景觀である。さて之等の植物は南方よりも寧ろ、蒙古、滿洲、北海道等の北方分子の植物と多分に共通的であるといふ事は山西省の植物を論ずる上に極めて重要な事實である

（北支自然科學學會員　岩田重夫）

五臺山の雲杉（羅漢松）

山西點描

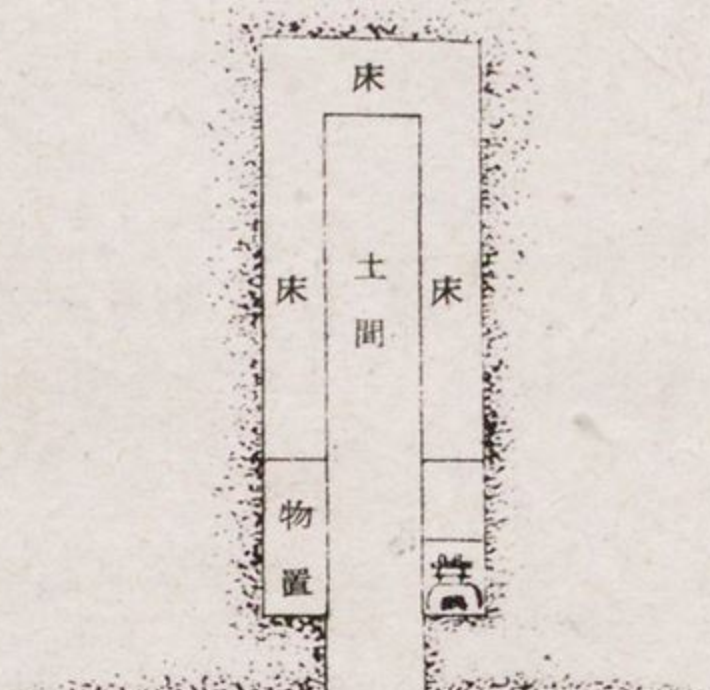
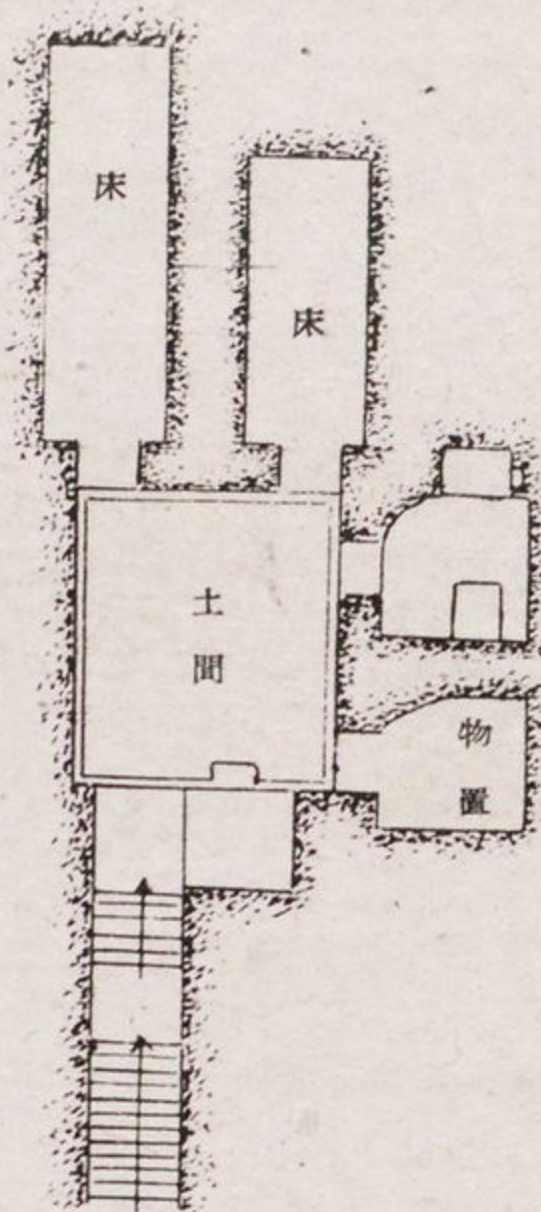
山西の山奥にある一初級學校——日本の寺小屋を思はせるではないか

挽臼は驢馬が挽くとは限らない、驢馬も牛も居ない家では手のあいた者が挽く

山西省

穴居の斷面圖二種、右、最も簡單なもの、左、高級なるもの、任意の部屋一切を備へてゐる。

内部の道具、人間の巣といふ感じである

穴居の外觀

住居に關する文字に穴冠りをもつものは少くない。例へば𥦗、[illegible]、竈、窖、窓など。これで支那が特に古代に於いて居住様式は穴居を主としてゐたことを想像することが出來る。

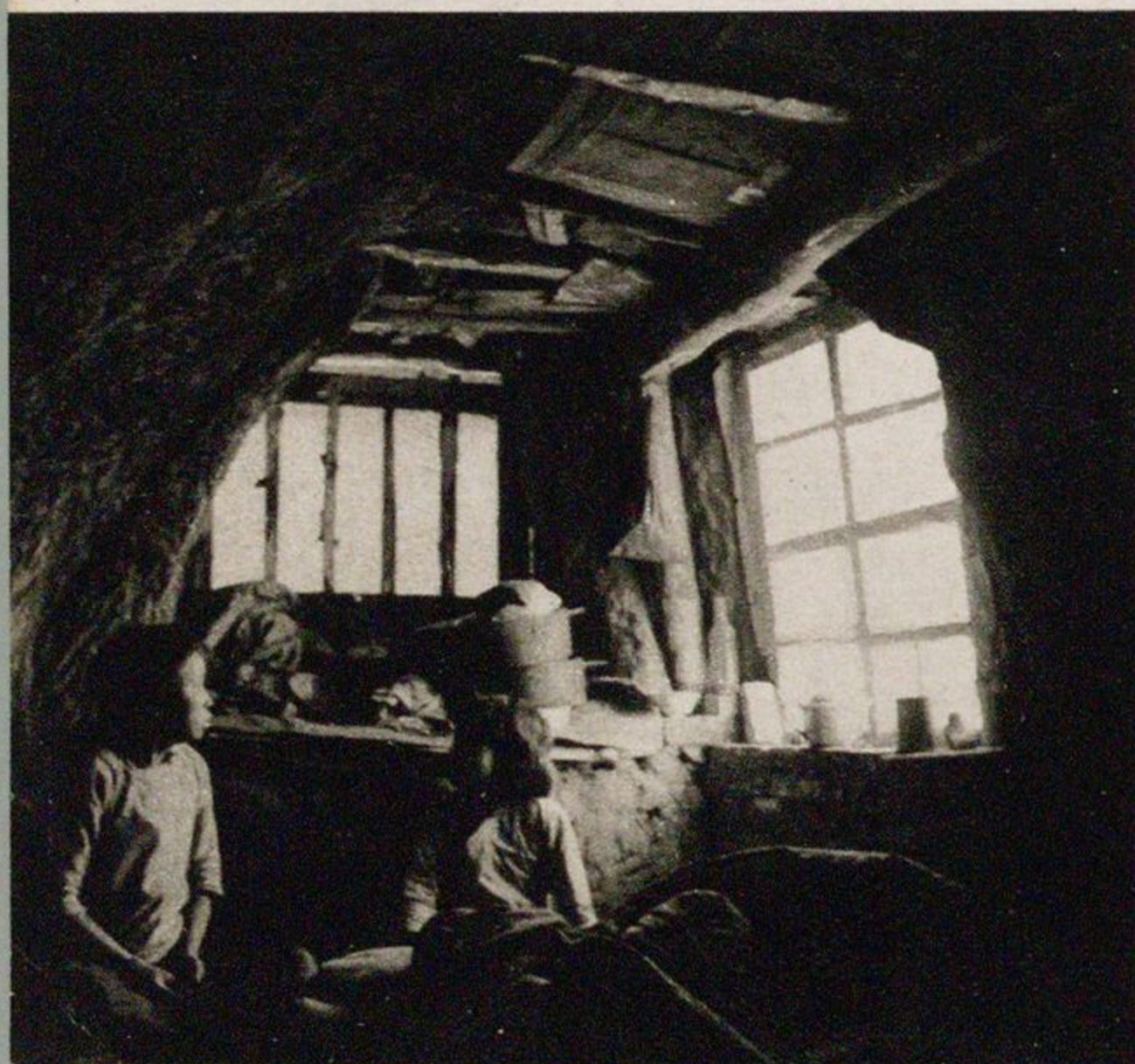
尤も殷以前の遺跡が河南や山西で發掘されたものは竪穴になつてゐるが、これが現在見る様な横穴にどんな過程を經て何時頃から變化して行つたかはまだはつきりしてゐない

併し乾燥した、そして寒暑の差の極端にきびしい地方では、少くとも土石を主な資材として住居を營むのが合理的で、これで室內と室外の氣象條件をよりよく隔離し得るわけである。而も、かうした處には、可溶性塩分の多い土層がよくあつて、或はこれで日乾煉瓦が容易に作られ――その土層の塩分がよく凝結を助ける――それで手取早く家屋が築かれ、或ひはその土層に穴を穿つて住むことが出來る

尙穴居をその穴の方向から見て、南面する土壁に一方向に穿たれたもの――これが大多數を占める――ᒣ型の壁に二方向に穿たれたもの、ㄇ型に壁に切り込み、その三方向の壁に穿たれたもの、ロ型の大きな竪穴を掘りその四方向の壁に穿たれたものといふ風に分けることも出來る

二面にあかり取りのある穴居は珍らしい

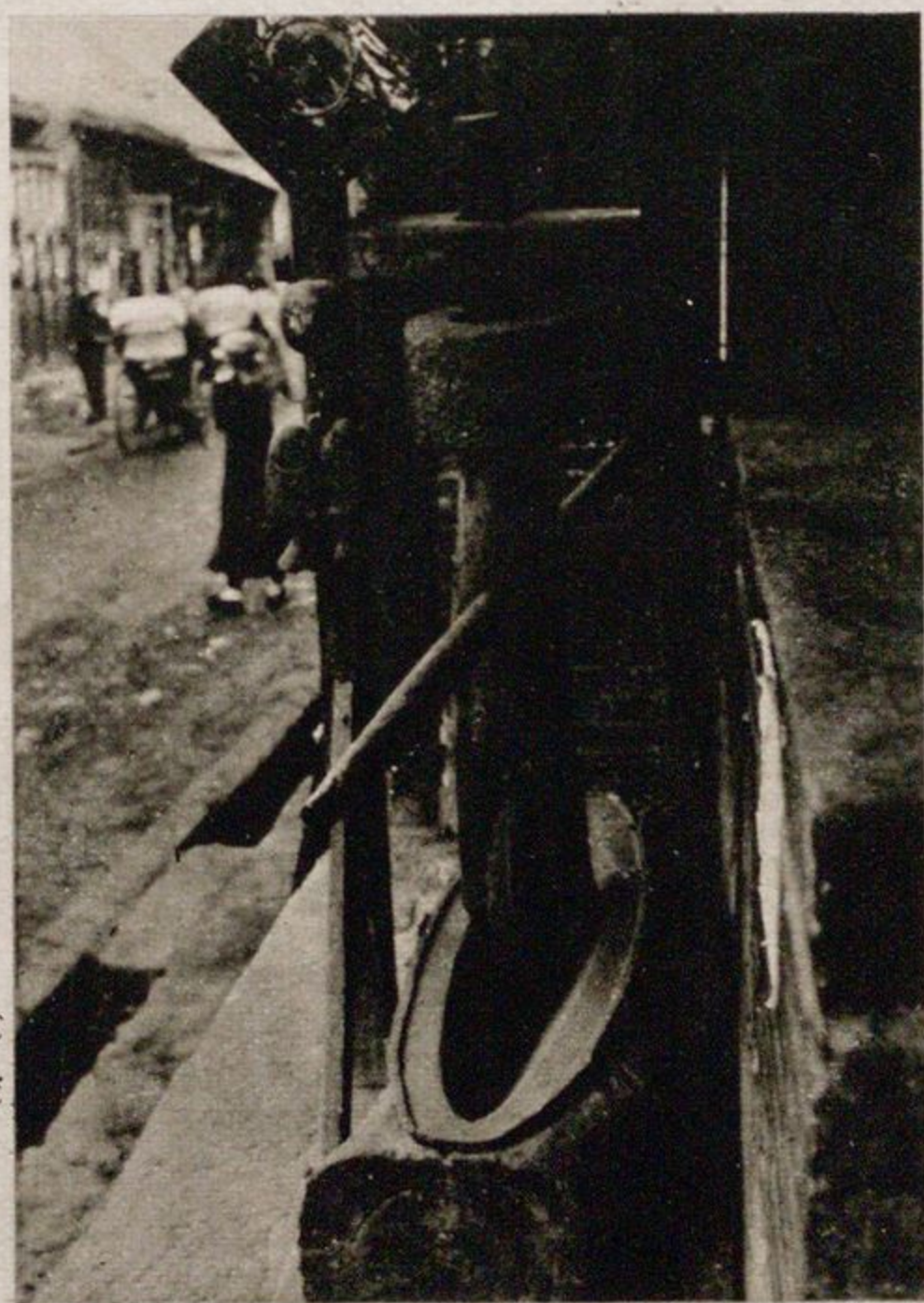
入口

山西省

首都 太原

首義門の標語

舊き太原の一面

漢藥店の招牌

新らしき太原の一面

山西の省城太原。山西省の略中央に位し、山西開發の動脈たる同蒲、石太兩鐵道の連絡地に跨つてゐる、この太原くらゐその感じのぴつたり來る省城は少く、文字通り山西省に於ける政治、經濟、文化の中心である。沿革を見る・に漢が陽曲（太原の舊名）縣を創置した昔は問はず、その地理的條件に因り、由來北部支那に於ては山東の濟南と共に政治的一中心地を保持し、今次事變前は彼の閻錫山の所謂「山西モンロー主義」の本據として賑盛を謳はれた。

太原城は、その西方を流れる汾河の培養した太原盆地の一角を占め、元代に山西の首都として築造され、明、淸またこれに倣つた名城だけに、城觀は實に堂堂たるものである。然し人口は十五萬で、北支の省城では濟南の五十七萬、開封の二十一萬、保定の二十八萬に次ぐもので、最少である。その產業經濟上重視すべきは閻錫山以來の現代的工業の發達で、即ち紡績、製鐵を始め、紙、煙草、マッチ、製粉等の諸工場では盛に操業されてゐる。日本人の進出は一萬數千に達し、國民學校は云はずもがな女學校も設けられ、また日本側の重要機關では領事館、華北交通の太原鐵路局等が擧げられる。名所には周の成王の弟叔虞を祀つた晋祠、天龍山及び龍山の石佛等がある

太原俯瞰

山西省

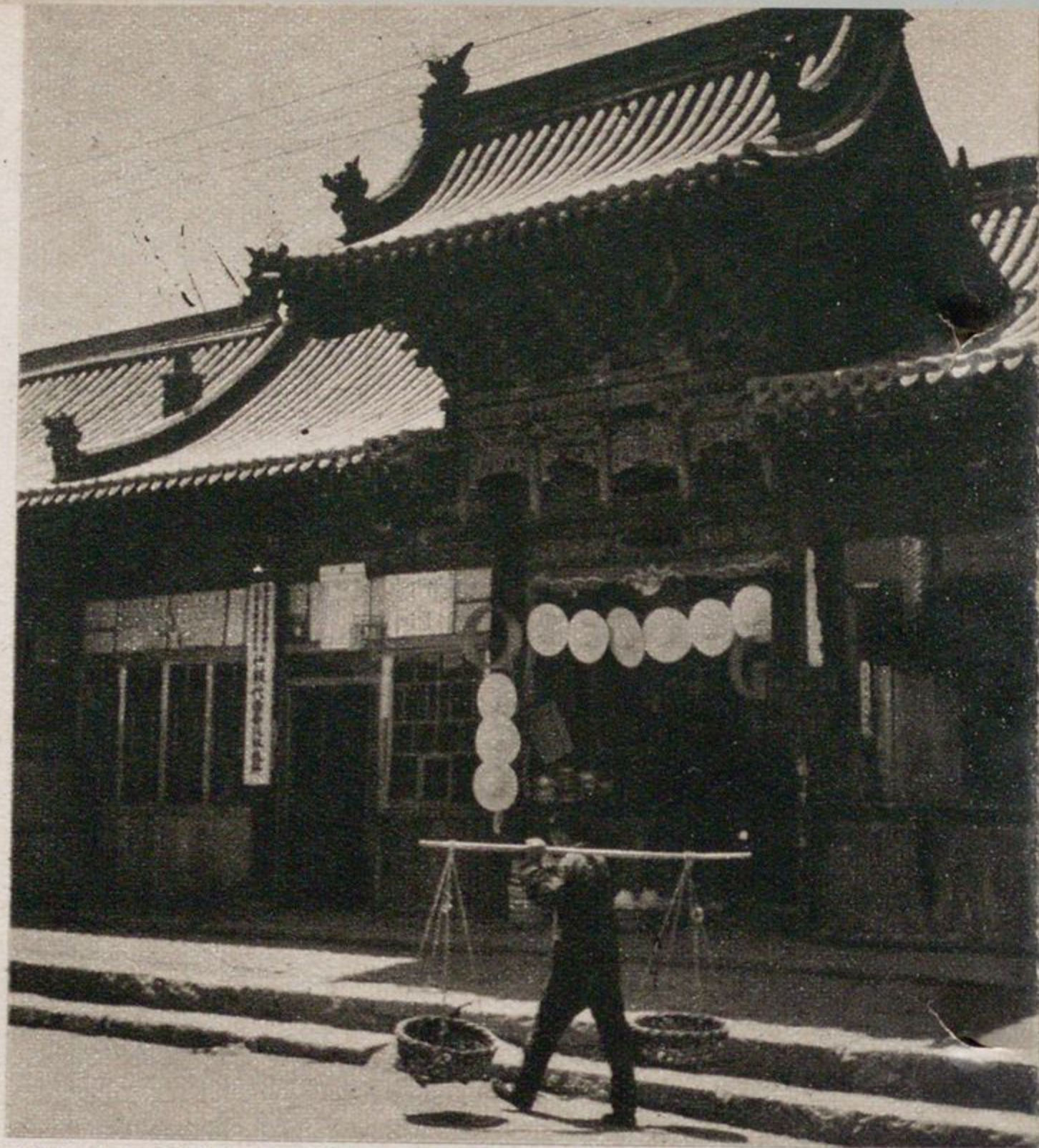
寧武

寧　武　城

寧　武　の

同蒲線に於ける最高海拔の驛、段家嶺の二千米から黄土の切取を拔き築堤を縫つて南下、その行手に白河に沿つた山坡の町、海拔千五百米の寧武を見下ろした景觀は非常に印象的である。然し思はず快哉を叫ぶ前に昭和十四年三月十五日、大同、寧武間の鐵道を完成せしめた皇軍と華北交通の、卽ち「軍鐵一致」の建設の苦難を想はなければなるまい。寧武は同蒲線上、大同から南下約百七十粁、太原から北上約二百粁の地點を占め、太原を中心とする鐵道沿線の地方都市では南の臨汾、西の陽泉等と共に邦人に親しみ深い地名である。經濟上から觀た寧武は背後一帶の石炭は別として、有望な鐵鑛もある

忻縣

忻縣は寧武から南へ九つ目の驛で、距離にして約百粁、東方に滹沱の流れ、東南方に一連の秀峰を望んでゐる。大同、太原間では最も廣濶な盆地の中心に位置し、地方都市には珍しい立派な街觀を見せてゐる。人口約一萬、內日本內地人は三百程であるが、神社も鎭座し、一應、日本人の進出地の形態を備へてゐるが、特記せらるべきは、その西方に北支には極めて稀少な自然林の一地域を有することである。從つて、量は少いが當地は北支有數の木材の市場となつてゐる。人口約五千、日本內地人の進出は二百數十を算してゐる

忻縣の人々は商才すぐれ、縣城また榮え、各商店は堂々たる構へである

富める忻縣の街には立派な家が建ち並ぶ

山西省

臨汾

支那の帝王は周禮の所謂「三皇五帝」で、最古は神武紀元前二千二百年とされてゐるが、書經今文或ひは論語の示すところに據ると帝堯が最初である。堯は帝嚳の子で、初め陶（今の山東省定陶、或は今の山西省平遙）に居り、後に唐（今の山西省太原縣）に遷り、唐侯に封ぜられ、帝位に登るに及んで平陽府、即ち今の臨汾縣城に都した。同蒲沿線では太原以南第一の町で人口約一萬、日本內地人は千數百名進出してゐる。その名所堯廟は城の南門外六粁にあり、陵は城の東北二十數粁の堯陵村に、また舜に禪讓を餘儀なくせしめた、その「不肖の子」丹朱の墓も城の西北十五粁の王曲村にあり、臨汾が曾て王城の地であつたことを物語つてゐる

石の牌樓（臨汾）

臨汾の目貫き通り

黄河に望む蒲州の城壁

蒲州の朝（雨の日）

蒲州

蒲州は同蒲線の終端で、臨汾から約二百粁。途中に舜が禹に禪讓した安邑城があるが、この蒲州は舜が堯に讓られて建都したところで、今も城の東關の石額に「虞帝故都」（虞は舜の姓）と刻まれてゐるのを見る。由來、關中（西安地方）に對する要關で、彼の曹操をして「河東（蒲州）は天下の要害なり」と嘆ぜしめた。オルドスから山西、陝西の省界を劃して激しく流下した黄河は、この古城の堅壁を洗ひ、大きく八十度東曲して中原に向つてゐる。經濟上では地方的農産市場を出ない

山西省

農耕

北支の地勢圖を擴げて山西省に眼を向けると、省內全域が黃茶褐色に彩られてゐるので、綠一色の北支平野と對比されて何と又山ばかりの國であることかと云ふ印象を深くする。然るに一度山西省に足を踏入れると、彼方此方に想像以上の廣大な沃野が展開してゐるのに驚かされるし、車窓に映ずる山又山が、岩石の地肌を露出してゐない限り殆ど頂上近く迄耕され（本號地勢の頁參照）見事な階段畑として餘す所なく利用せられてゐる景觀に接すると、日本的な地勢觀を以てした山西省の想像畫は物の見事に抹消され、山西が北支の重要なる一農業地域をなしてゐると云ふ所以が始めて十分にうなづかれる。山西省の農業はその地勢の影響を受けて、大平原のそれとは著しくその趣を異にし、高原・山岳地特有の性格を多分に包藏してゐるが、而も其の地形の複雜さは省內に於いてさへ、南と北、東と西、盆地と山地との農業方式に著じい相違を齎らし、地域に依つて作物の種類や其の栽培方法に各種の差異が見られるのみならず、家畜や樹木の分布にも可なりの變異が見られるので、單に車窓を通じて見た丈でも山西農業の特質と其の複雜さが偲ばれる（江上）

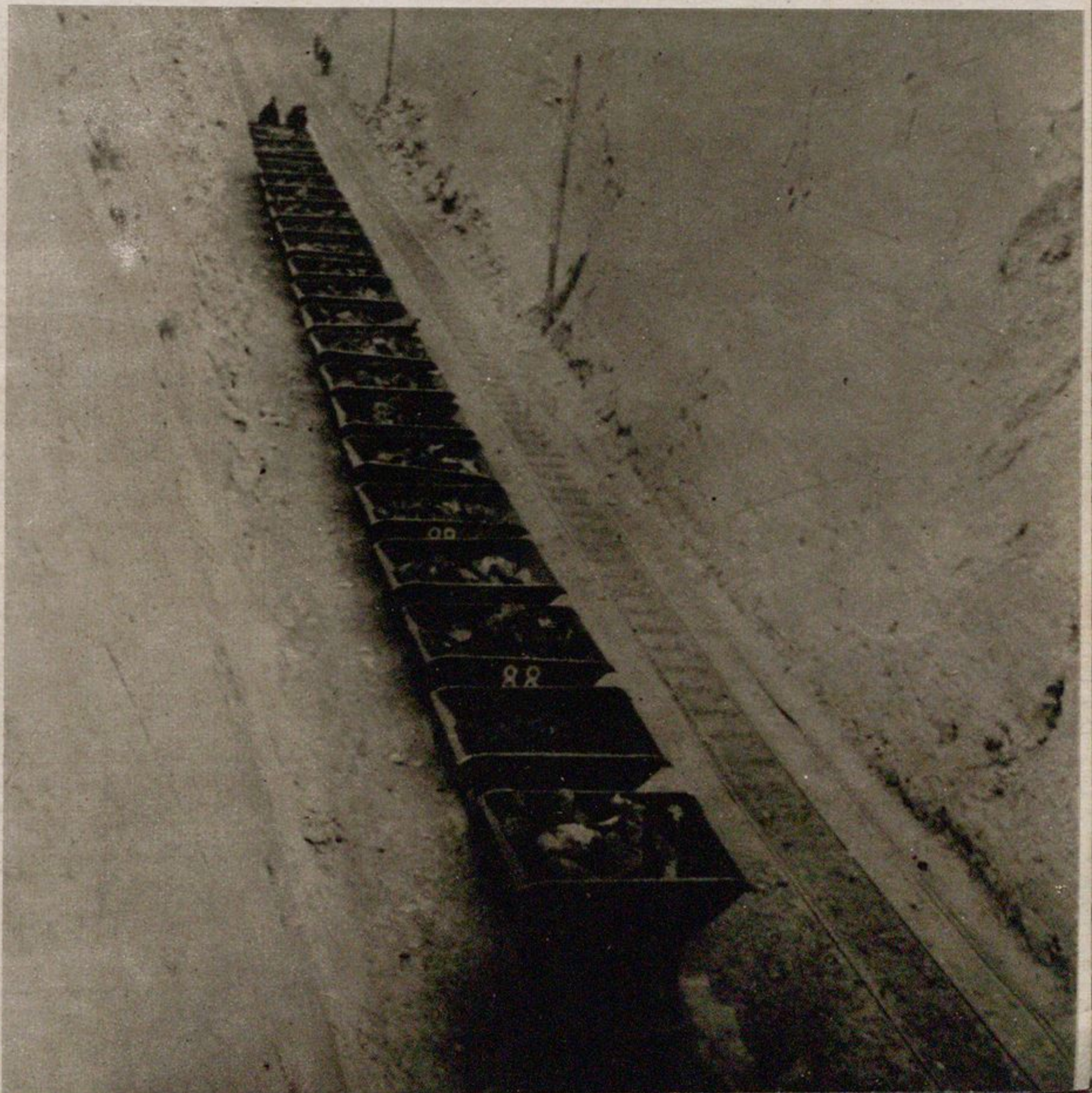
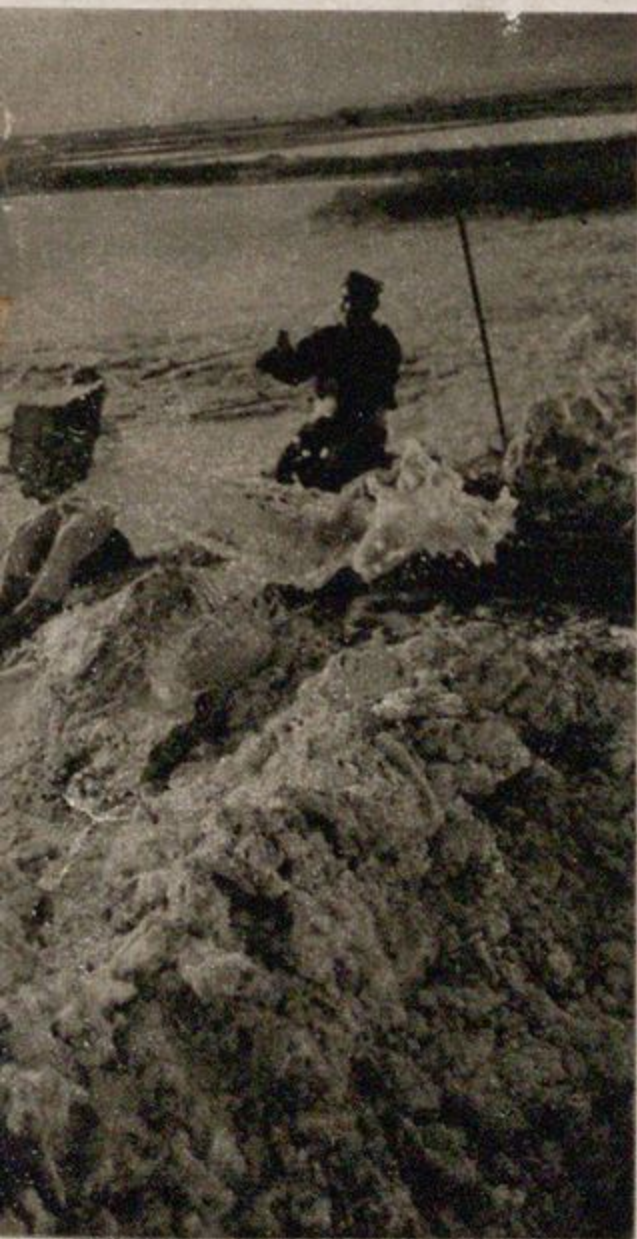
城平野地方黄土地帶の耕地

水の豊富なる滹沱(コダ)河流域の耕地

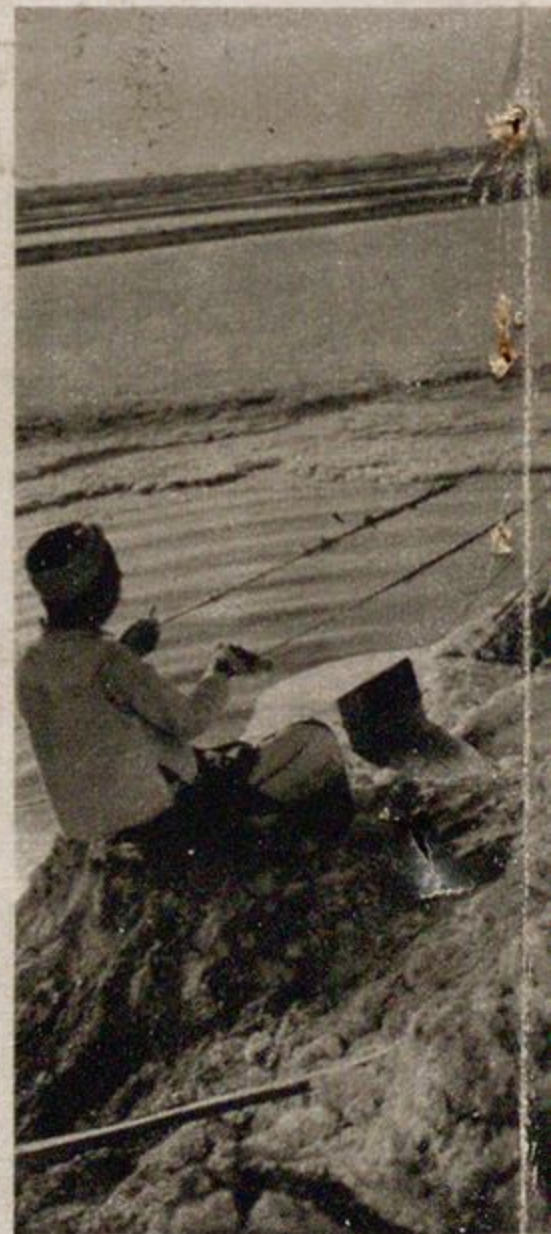
山西省

資源

山西省は各種地下資源に惠まれてゐるが、就中石炭、鐵、石膏、鹽を四大資源に擧げることが出來る。「山西」といへば「石炭」を聯想するのは常識であるが、資源の第一位を占める石炭の埋藏量たるや一二七〇億瓲といふ厖大な天文學的數字を示し全華北の九〇％、東亞共榮圏内の五三％を包有する、亦その炭質も各種各様に亙り、量的質的の兩方面の豐富さは將來大東亞共榮圏内に於ける石炭供給地として極めて重大なる地位を占める。鐵鑛も又省内各地に點在し從來は主として土法に依り多量の銑鐵を産出してゐたが、今や太原湯泉の鐵廠完成により製鋼一貫作業に迄發展せんとしてゐる。斯の如く鐵、石炭に惠まれた山西省は單に生産地としてのみならず將來重工業地帶として注目せらるべく、所謂「東洋のザール」の名を冠し得る地域であらう（大平）

山西省到るところに大小種々の石炭露頭がある、その一例

自然勾配を貯炭場へ自走

の山山山、支那文明が此の地方に發生し榮えたといふのも、見やうによつては
間生活に最も必要な此の鹽が此處に存在したといふことも一つの原因であると
へるであらう

鹽池遠望

鹽井から鹽水を汲みあげて鹽池に送る、さうして天日に乾燥して鹽を得るのである

山西の或る製鐵所

山西省

工業

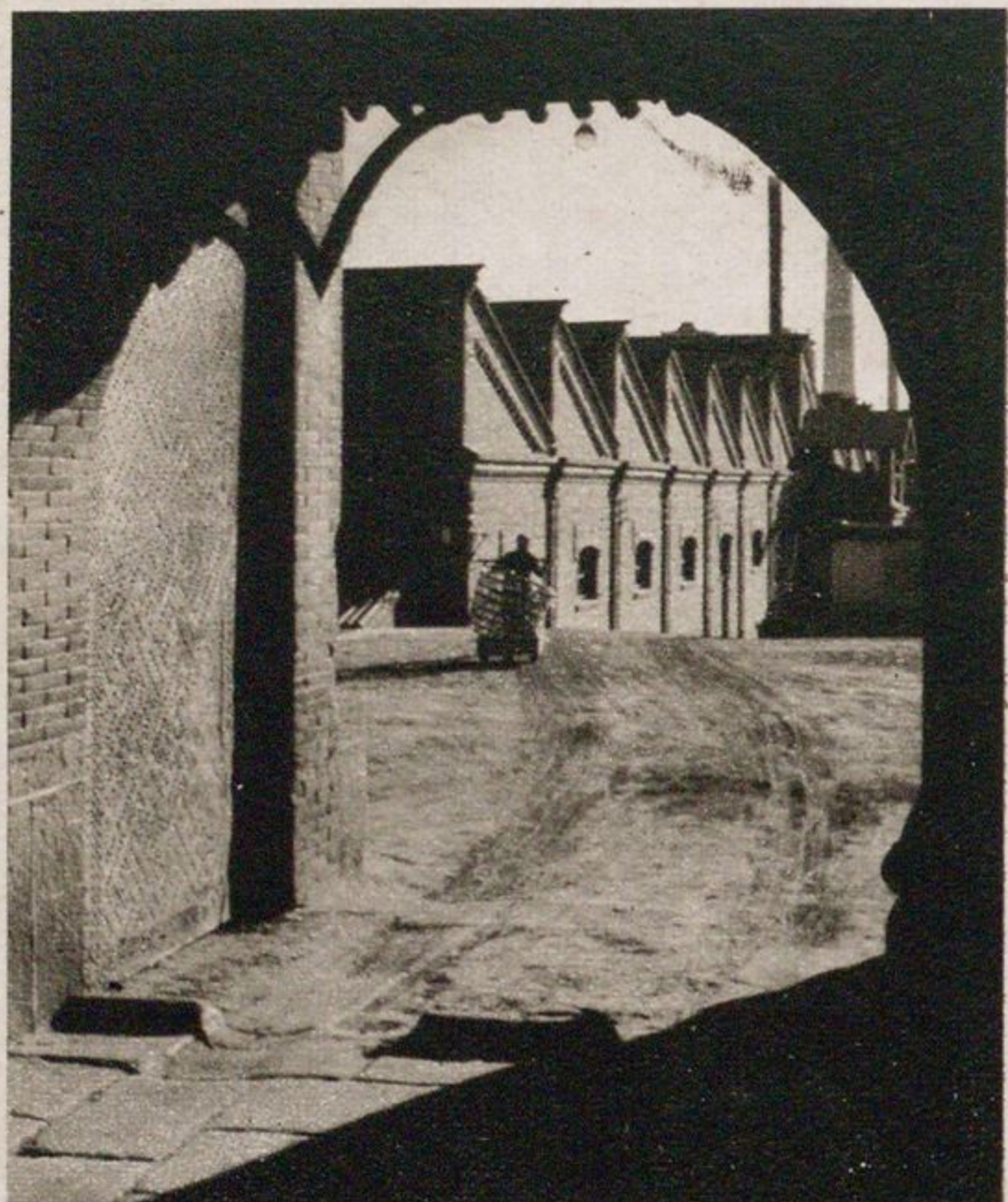
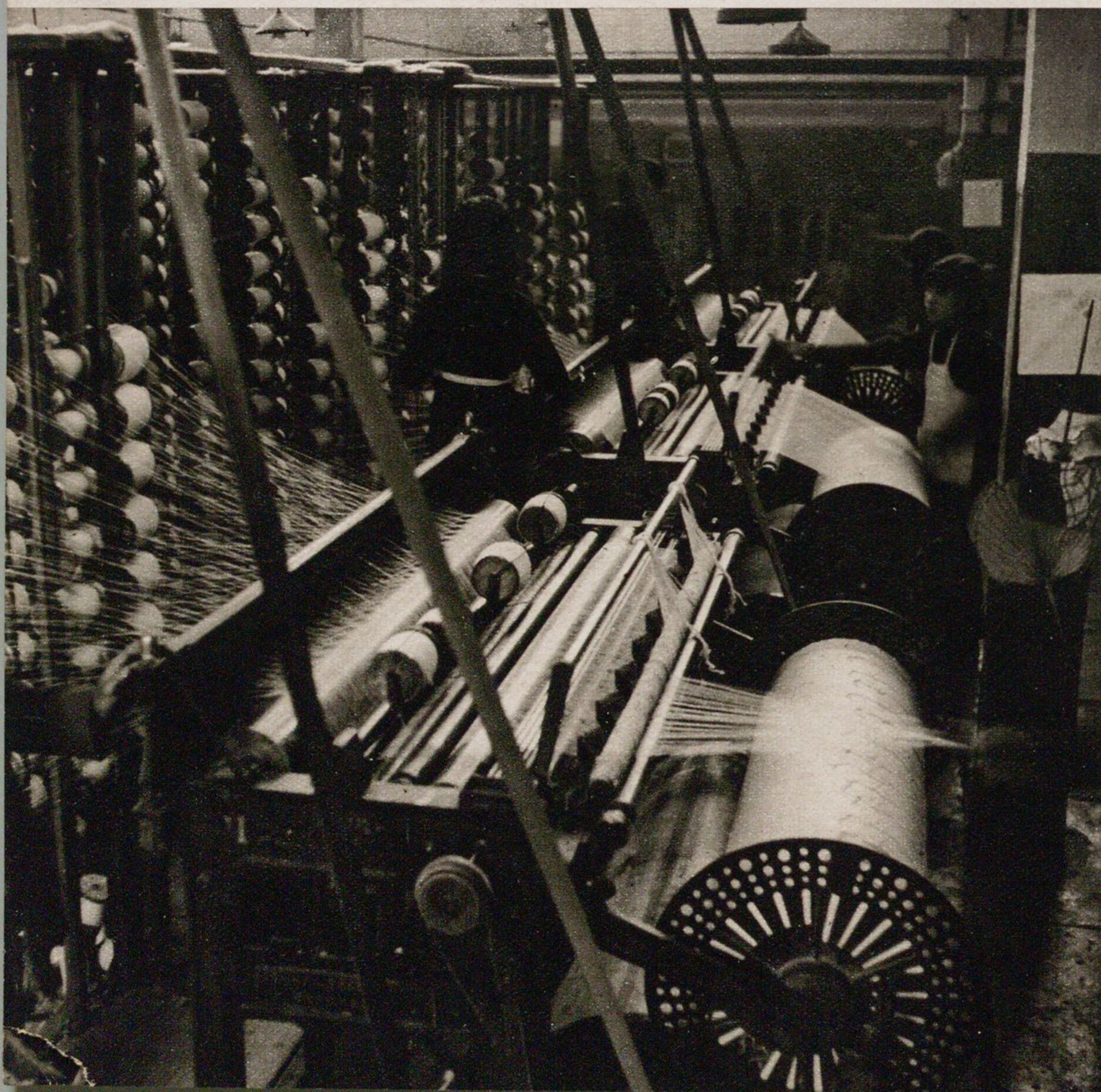
山西省を旅して太原城外に林立する煙突から吐き出される黒煙を見る時、あの山の中に斯る城市が存在し而も斯る近代工業の施設を有する大都會を發見することは一大驚異である。支那に於て上海天津青島等の開港地を除いて斯る工業地帶は見られない。太原城を圍繞する二十餘の工場は事變前山西の王者たりし閻錫山の經濟建設十年計畫に基き各種部門の工業を網羅して省内消費の自給自足政策を採つたに創まる。各工場に就て見ればその規模は甚だ小さく内容も又嶄新と謂ひ難いが、各種工業の見本的存在と見れば大差ない。事變に際しては幸ひさしたる戰禍を蒙ることなく軍管理として經營せられ來つたが、今や山西經濟新機構の主體として山西産業の傘下に入り新發足をなし愈〻將來を矚せられてゐる（大平）

或る紡績工場

綿布の包装

紡績工場

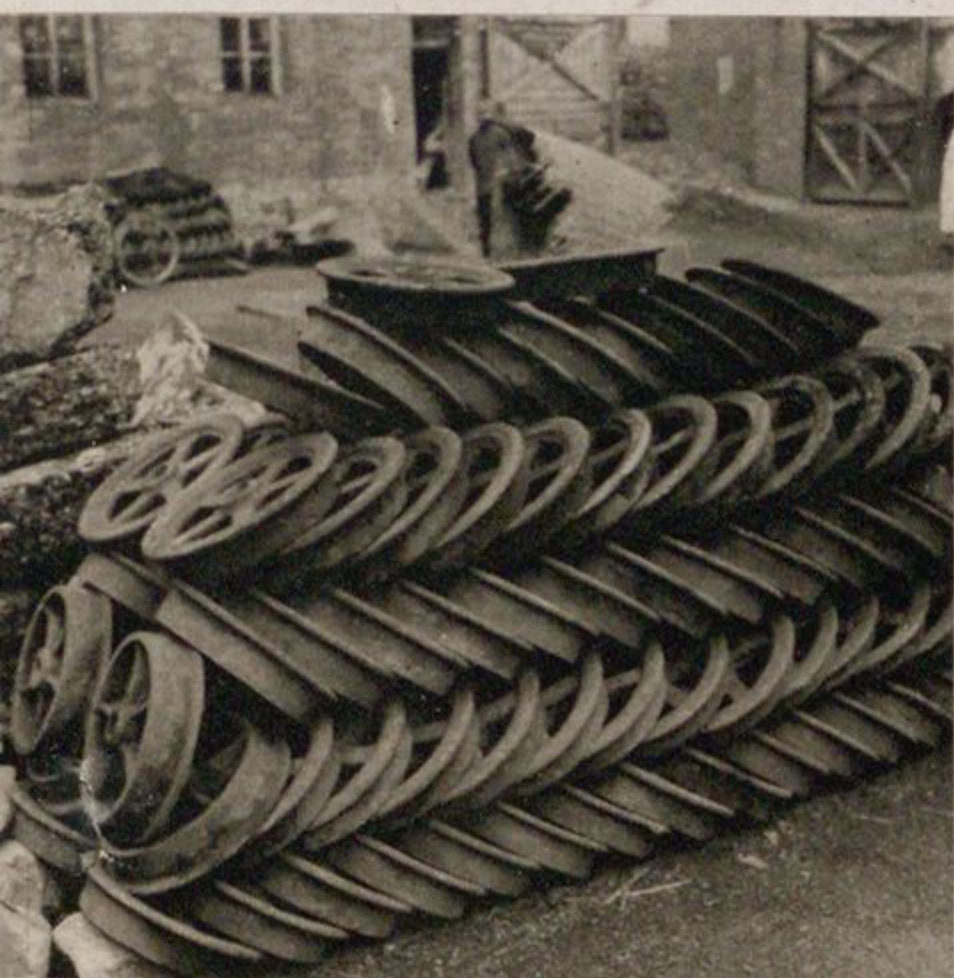
二

一

山西省

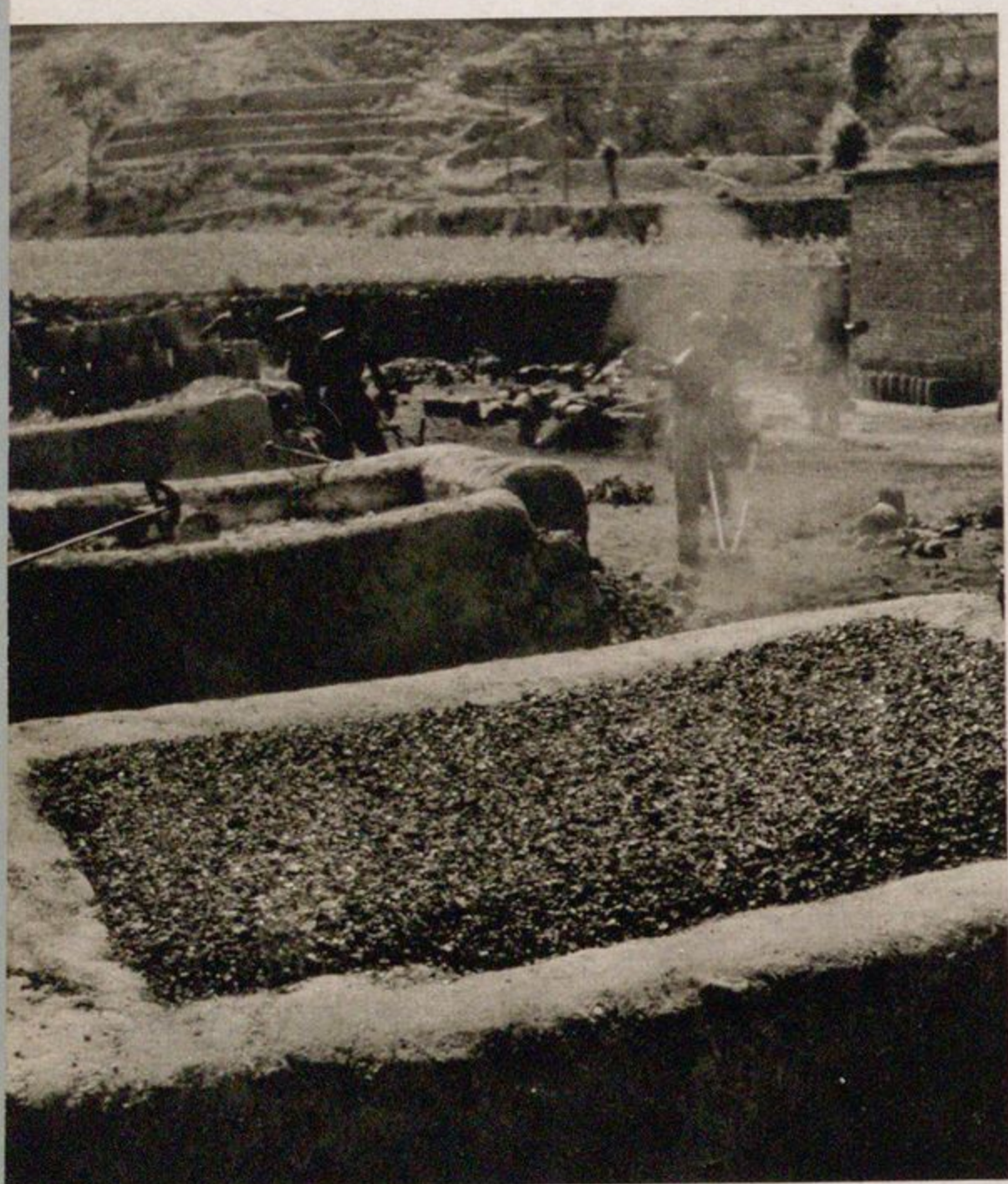
土法製鐵

山西省の土法製鐵は陽泉を中心とする平定、昔陽、和順一帶、及び潞安を中心とする高平、澤州、陽城一帶、即ち大行山脈に沿うて盛に行はれてゐる。材料は三十五パーセント位の貧鑛と石炭、黑土であるが、これは附近一帶に產出し大概馬で搬出されてゐる

此の製鐵法は二工程式にて銑 *

八

一、品位三十五パーセントの貧鑛を山から驢馬で運ぶ
二、第一工程の爐床をつくる
三、坩堝（耐火粘土でつくる）の中に石炭三・五、黑土一・五、鑛石五、の割合で混入し、右の爐に入れて燒くと
四、スポンヂ鐵を得る
五、更に石炭八、スポンヂ鐵二の割合で第二工程爐にて風脈を送る
六、そのふいご
七、銑鐵を得るのである。それは直ちに鑄型に移される
八、鑄型から出たばかりの製品
九、山西省到るところに土法製鐵の工場をみる

九

三

五

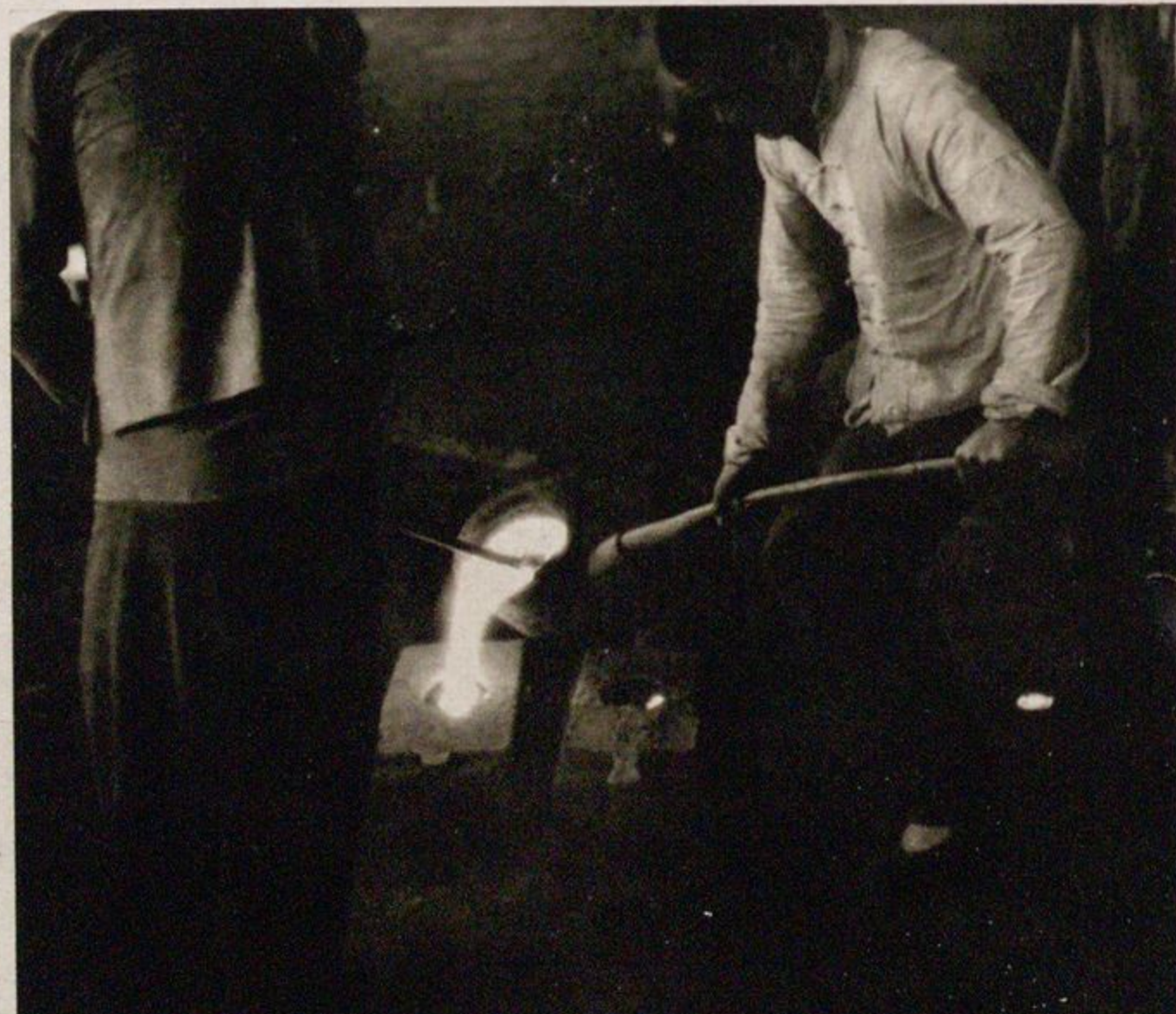
＊鐵を得る迄に五十五時間を要し第一工程は、耐火粘土で作つた坩堝に石炭三・五黒土一・五鑛石五の割合で混入し第一工程爐に入れて三十時間の自然通風によつて燒結鑛（悶鐵又はスポンヂ鐵）を作り第二行程に於て右の燒結鑛を更に石炭八燒結鑛二の割合で坩堝に入れ第二行程爐にて風壓を送り二十五時間にして銑鐵を得る

右の銑鐵は大概直ちに鑄型に移して農工具が作られる

六

七

山西省 手工業

陶器

山西の豐富な燃料は古來製陶業を榮えさせた。村全體二、三百戸がことごとく窯を焚くといふのが到るところに存在する

その製法もまた單純素朴なその製品も昔のままで残り、捨て難きものがある

黄土層を利用した窯

全村窯を焚く

製作

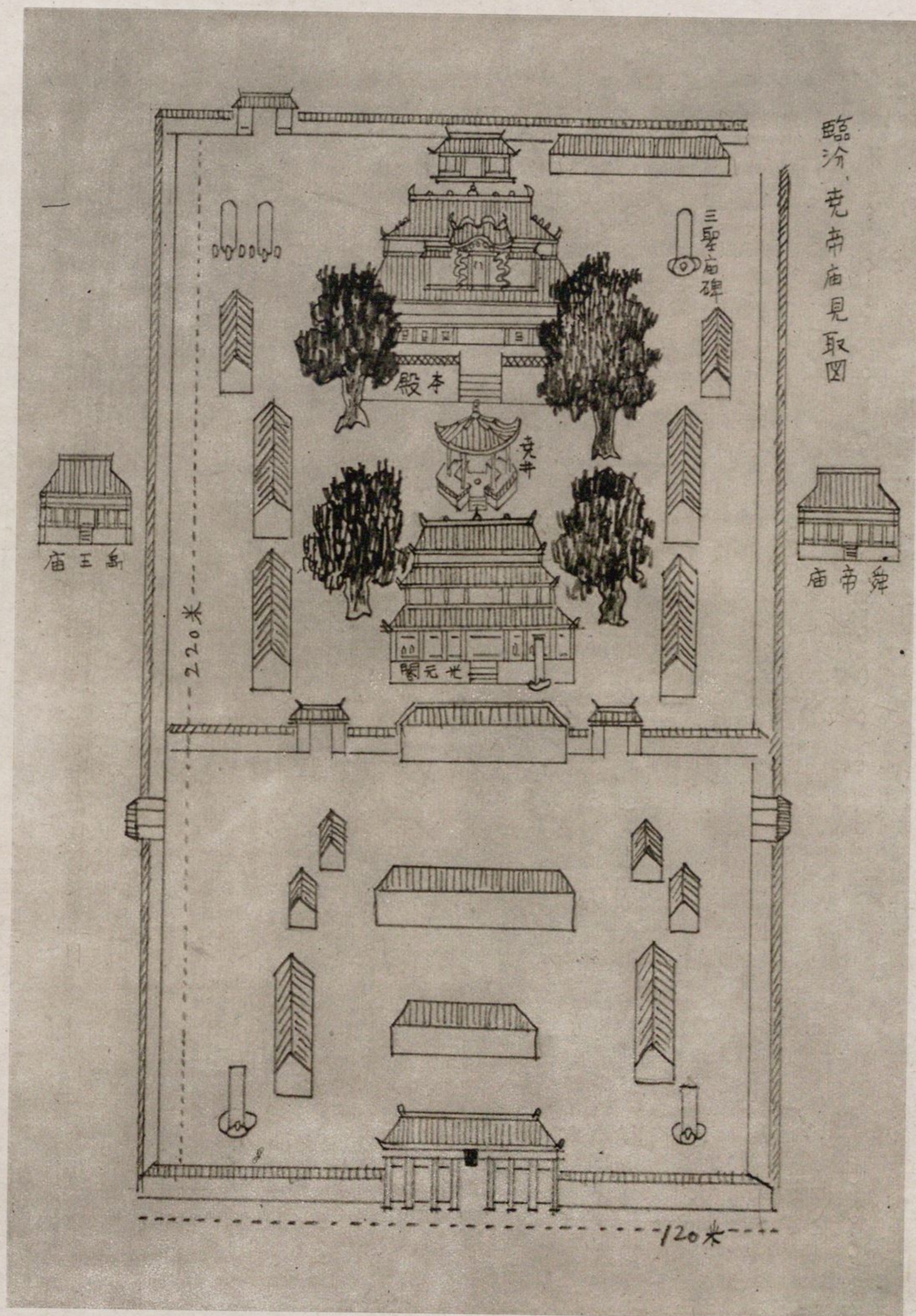
土壁を利用して紙を乾す

原料を輾く

紙

包装紙、ちり紙、皿拭などに使用して非常に用途の多い草紙といふ極めて粗末な紙は北支の到るところで手工業的に造られてゐる。その工程については本誌でも既に紹介した通りである。山西方面では蘭封の製紙が有名である。また晋祠鎭では黄土層の山壁を利用して紙を乾燥させてゐる、その展望は實に壯觀である

臨汾、尭帝廟見取図
三聖廟碑
本殿
尭井
禹王廟
舜帝廟
光元閣
220米
120米

堯廟

堯庙は支那第一等の天子「堯帝」を祀つた庙である。堯帝の庙祠は支那到るところにあるが、臨汾所在の堯庙は臨汾が堯の都であつた所からその本山格の地位を占め、それだけに民衆の尊崇の對象として、絶大の勢力を有してゐる。此の庙の沿革に就いて最初に記載した書物は魏の土地記で「平陽城の東十里、汾水の東に堯の神屋及石碑あり。庙は城南八里に在り」とある、しかし此の城南八里は晋の元康年中（神武紀元九五〇年）に建立した庙の位置であり、現在の場所（伊村）に在る堯庙は唐の顯慶三年（神武紀元一三一八年）に移建されたものである。以來實に千二百八十餘年を閲するものである。此の間には兵禍、天災、自然朽破のために幾度か補修、改修を經てゐることは勿論である

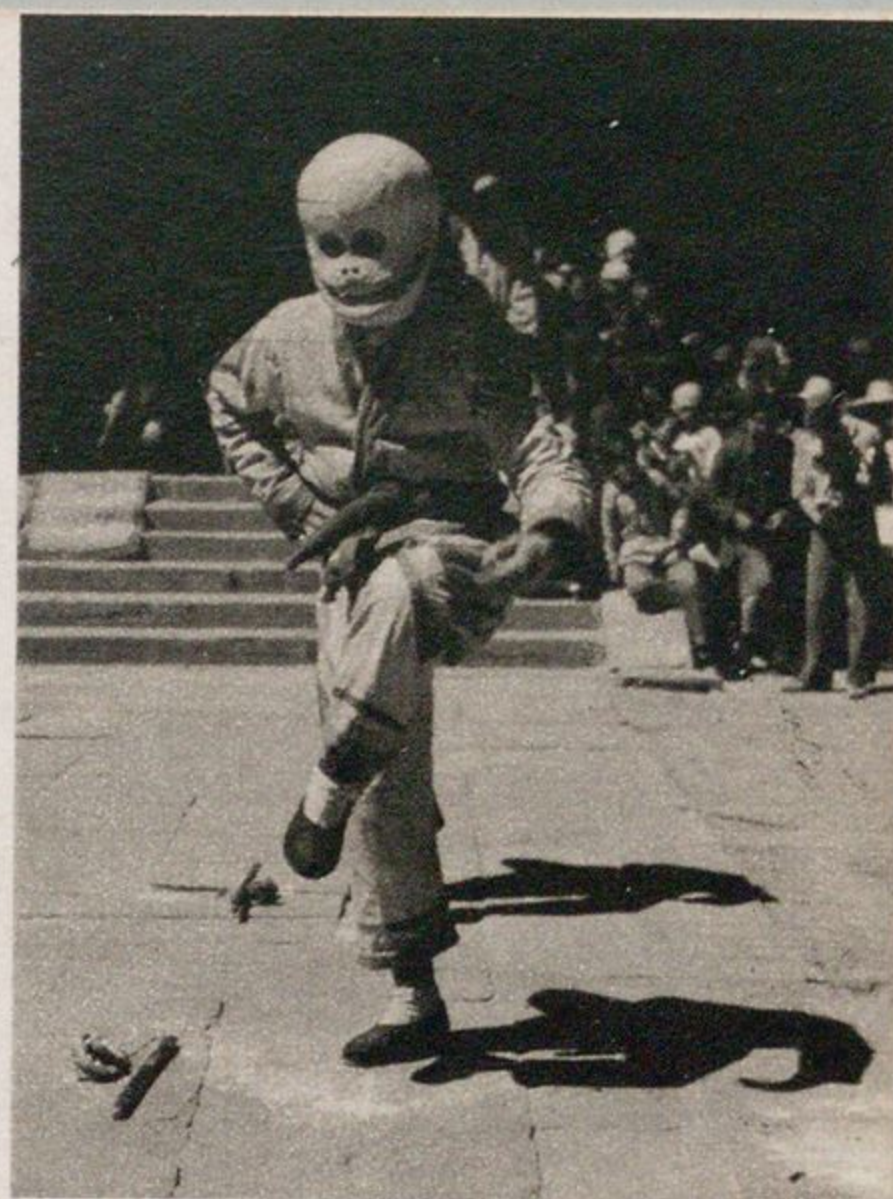
堯帝廟本殿、前方は堯井、六月大會の當日

五臺山

沙漠を越えて蒙古から

喇嘛廟、白鬼の舞

聖域臺懐鎭

山西省

歸りの途すがら

佛教の聖地五臺山は山西省東北部五臺山脈—三一四〇米—の中の東臺、西臺、南臺、北臺、中臺の五つの高峰から成り、東西八里、南北二十五里にわたつて峨々たる山間に喇嘛教や佛教の廟が點在してゐる。喇嘛廟を黄廟と云ひ、佛教の方を青廟と呼んでゐる

五臺の開基は後漢末とも云はれてゐるが、北魏說が正しい

喇嘛教を國教とした元の時代以來の五臺の黄廟はその最盛時には三百六十餘を數へ、—現存するもの百七十餘—青廟を凌ぐ狀態であつた

五臺山と日本の關係は深く、數多の僧が入山し、平安朝、鎌倉時代、室町時代の日本の宗教、文化に及ぼした影響は非常に大きいものがある

また「滿洲」の地名は文殊菩薩の轉音であると一般に信ぜられてゐる。それは清朝開國の當時文殊菩薩の信仰が盛んであつたからと察せられる

この聖域も今次事變のはじめ頃、一時共產軍の蹂躪するところとなつたが、皇軍の駐屯以來、治安は全く囘復し、年々六月大會も開催せられるやうになつた。善男善女は滿洲、蒙古は勿論、日本からも參詣者が押寄せ、以前にも增した盛況を呈するに至り、まさに東亞の聖地たらんとしてゐる

六月大會は一日から三十日迄行はれ、その期間中鐵道では列車を增發し、蒙疆バス會社では自動車の定期運轉を行つて、千古の靜寂境が一時に大都會の如き殷賑を呈する

ラックで

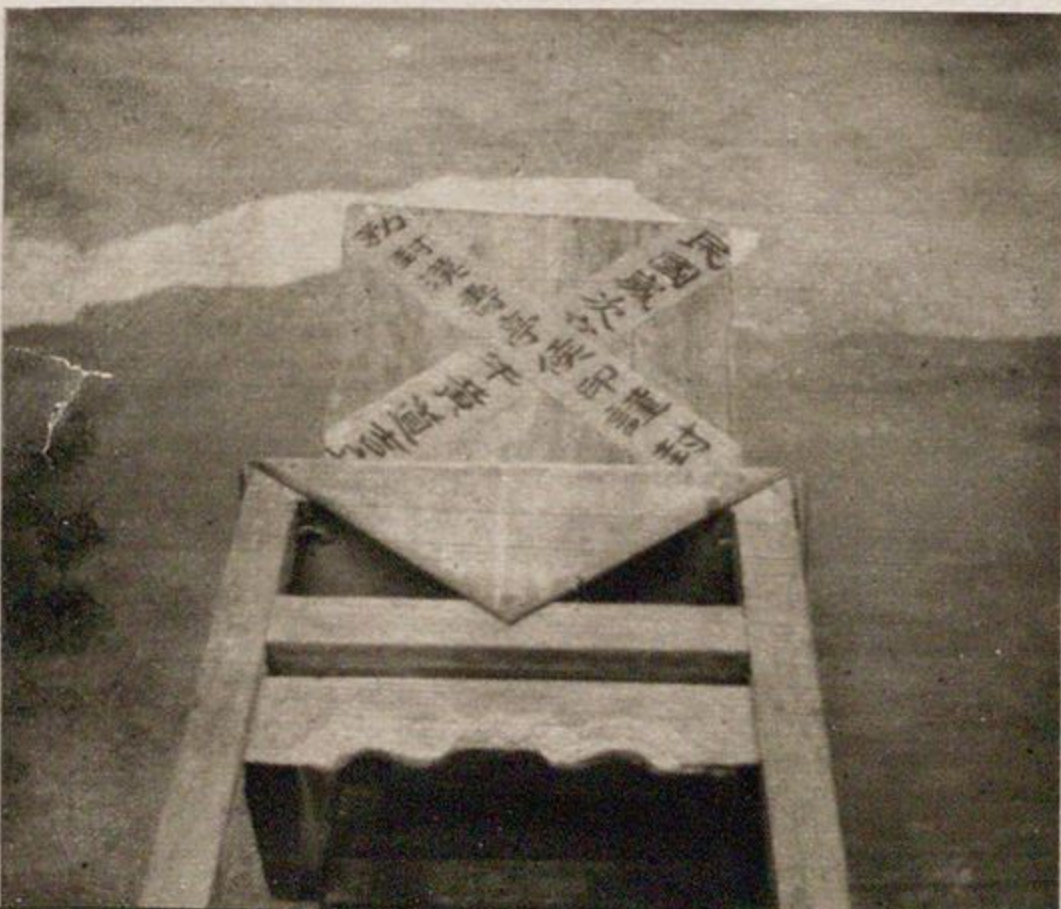
山西省

境内の石獣、石人のうちから拾ふ

關帝庙のある解縣にみる石の牌樓

關帝庙

關羽樣の封印

本殿の柱

關　帝　廟

廟の壁に嵌められた石彫の一つ

關帝廟の本尊は三國志でお馴染みの關羽である。山西省南同蒲線解縣はその出生の地であり、そこに關帝廟の大本山がある

關羽の信仰は支那本國だけでなく、滿洲、日本から遠く南洋方面にまで行はれ、今日尚大衆の人氣は衰へてゐない。關羽はそもそも武將であり、從つて武神であつたのであるが、支那人は此の神樣をいつのまにか財神にしてしまひ福の神にまつりあげ、惡魔拂ひにし、たうとう萬能の神樣にしてしまつた。關羽樣もさぞお忙しいことであらう。

彼はただに忠と義と俠の體得者であるばかりでなく、その行爲が非常に高い道德性を帶び、その超人的な武力とともに脛に傷もつ輩を大いにおそれさせた。勸善懲惡にはもつて來いの強い神樣である。（尙本誌よみもの頁に詳細を誌す）

山西の古代文化

神話らしい神話を持つてゐない支那では、古代の傳説が如何にも實在しさうに物語られてゐる。從つてこの國の古代傳説は空想の世界に乏しく、一見歷史事實かと思はれることが多いのである。堯や舜や禹と云ふ帝王の如きも儒家の理想的精神から生れ出た架空の人物だと云ふ説は、新しい歷史家のひとしく認めるところであるが、何れもこれら帝王の都なるものが山西南部にあるところから推すと、矢張り何んとなく氣に掛る

堯の都は平陽卽ち臨汾、舜の都は蒲坂卽ち蒲州、禹の都は安邑卽ち夏縣だと傳へられてゐる。汾河の下流、黃河の中流に臨み、土地は肥沃である許りでなく、人間にとつては缺くことの出來ない鹽が此處からとれるではないか。かうした地の利を得たところに古く文明が發達し國家が形成されたとしても不思議ではあるまい

これを實證的に明かにして行かうと云ふのが史蹟調査の役目である。勿論、遺物遺蹟を實證的に調査してみても傳説の世界と歷史の世界を區別することは所詮、不可能かも知れない。然しさうした結論へはさう急ぐ必要がないであらう

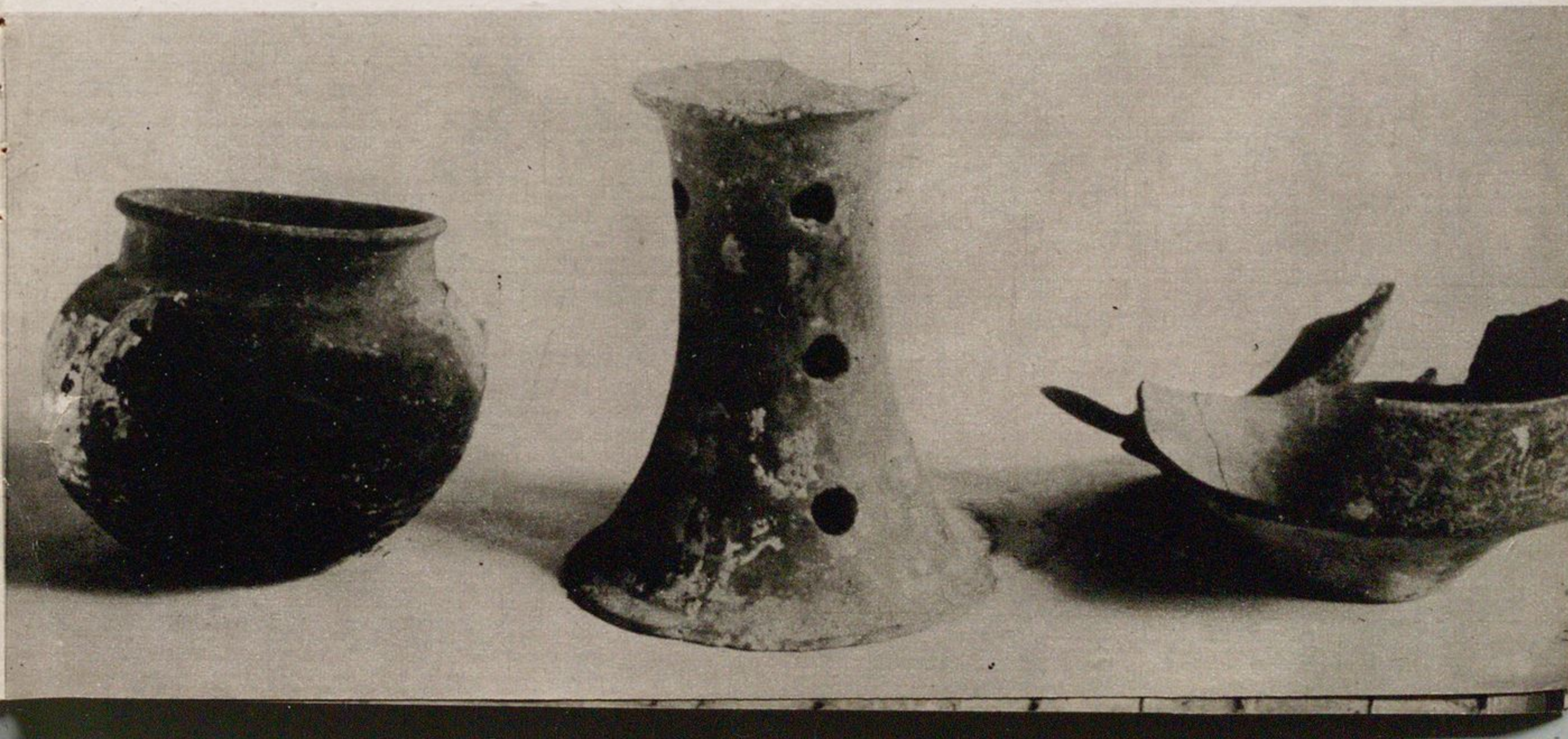
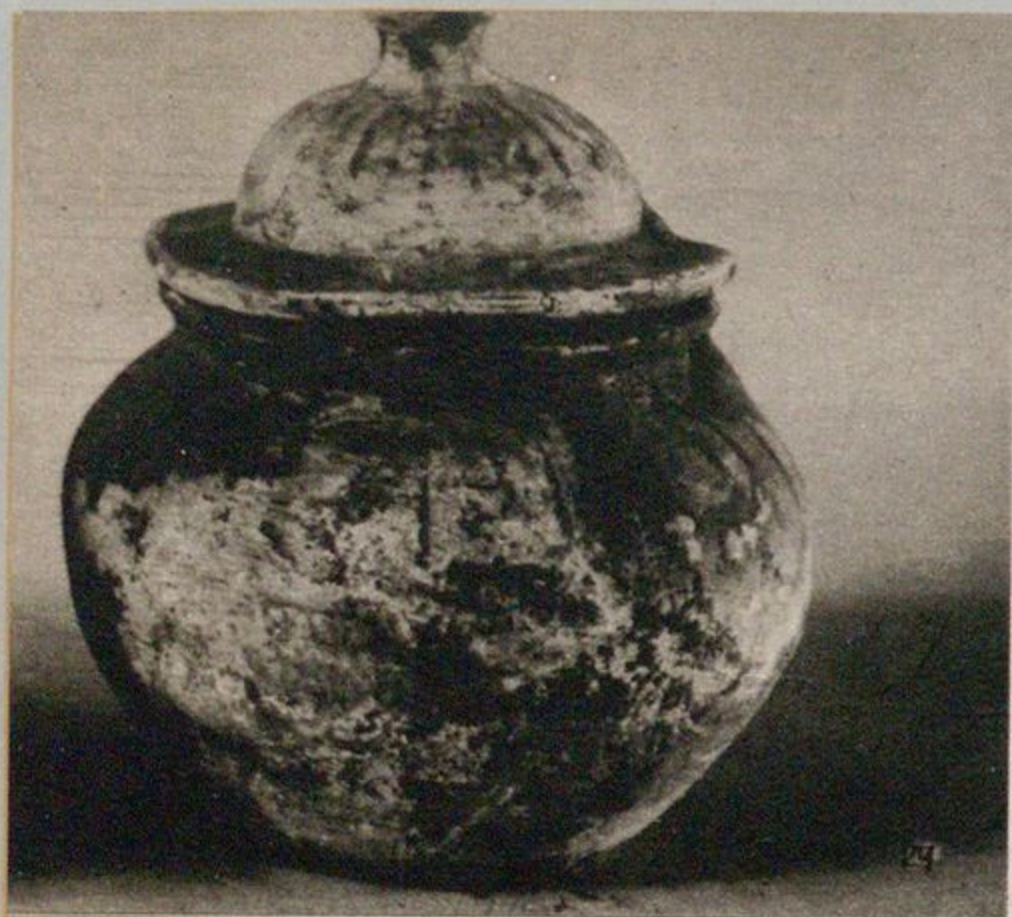
民國の十五、六年頃、夏縣の西陰村や萬泉縣の荊村で新石器時代の遺蹟が發見され、調査された。それから後、大谷縣や忻縣等でも遺蹟のあることが知られ、本年は臨汾の劉村でも發見されてゐる。此等の遺蹟を通じて知り得ることは既に山西南部地方では悠久な昔から定住し、農耕生活を營んでゐたと云ふことである。そこからは壺や鉢などの表面を磨研しそれに朱や赤や白や黑で彩色をほどこしてあるものの破片なども出てゐる。これを彩色土器と云つて今から五六千年も以前に既に西方文化の影響のあつたことを證據立てるものである

周の時代には封建制度が行はれた。傳ふるところでは唐叔虞と云ふ人が晉の初代だつた。山西を一に晉とも云ふ。されば叔虞の封地が山西であつたことは

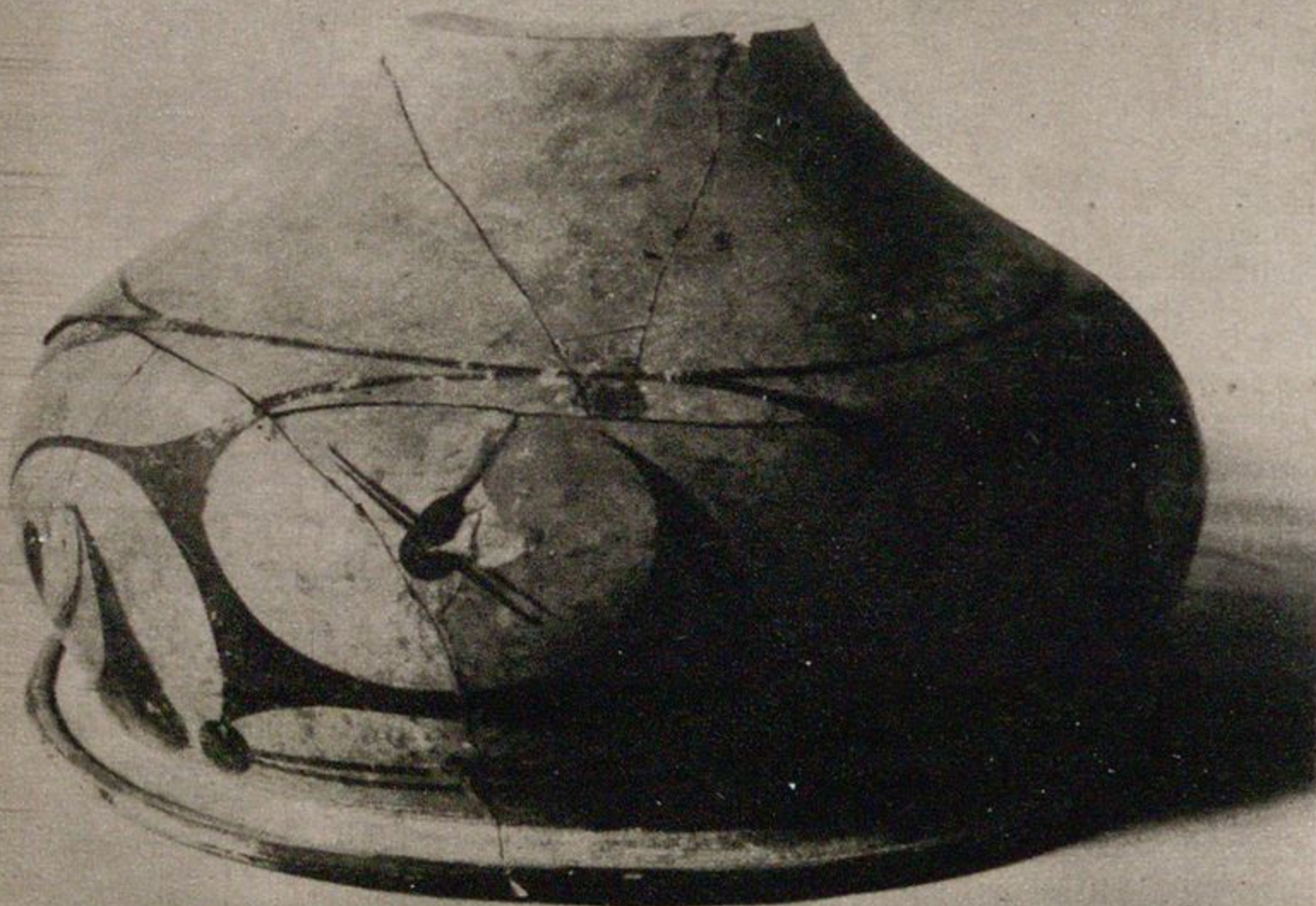
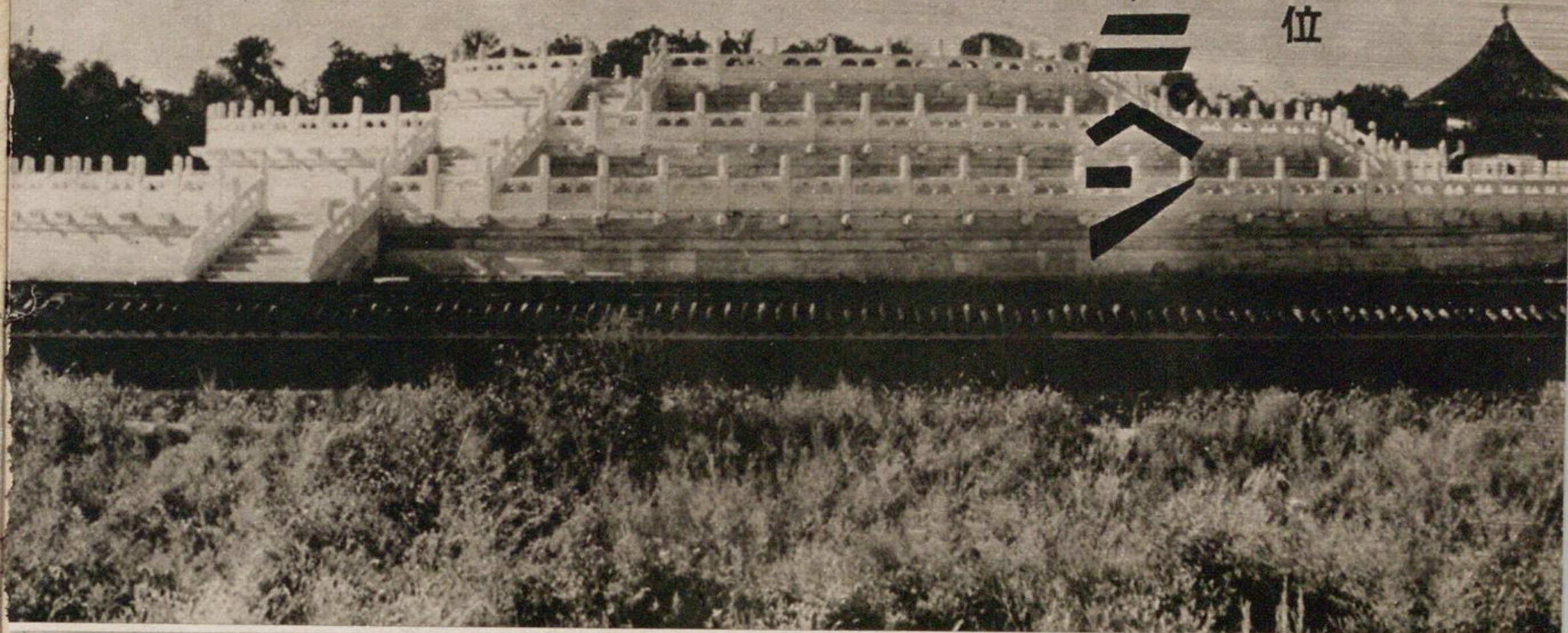
四

三

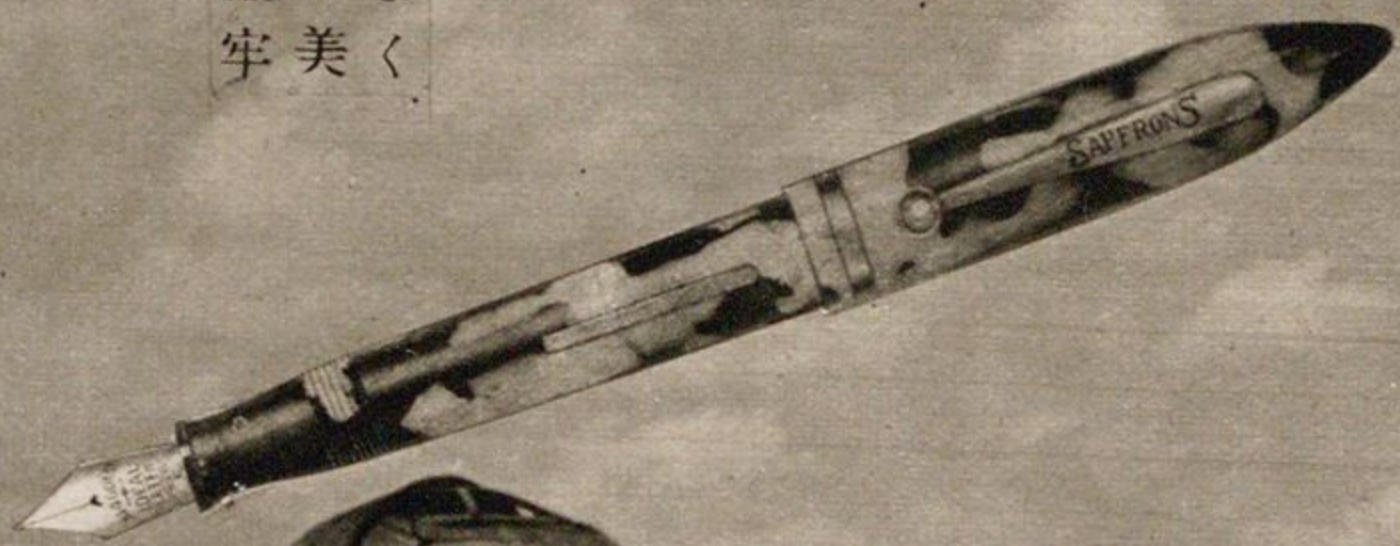
五

六

申すまでもない。彼の居城は今日の舊太原だつたとも云へば翼城縣だつたとも傳ふ。何れが正しいか知らないが、その子孫の文公は春秋五覇の一人だ。降つて晋は韓と魏と趙に分割される。この事件以後が卽ち戰國時代である。先年渾源縣（今は蒙疆に入る）から出た素晴しい青銅器群は戰國時代の文化を物語る可き貴重な發見であつた。萬里の長城は既に戰國時代に築造されてゐるが、かうした發見に依つて漢文化の北方進出が一層實證されるわけだ。

然し要するに、山西の古代文化は未だ殆んど知られないと許してもよい。山西の資源が未だ處女地として殘されてゐると同様、古代文化の究明も今後に殘された無限の關心事なのだ（小野）

一、漢代水壷、蒲州東王村出土
二、石器時代の土器、出土地不明
三、漢代の鼎、蒲州東王村出土
四、唐代彩畫土器、蒲州東王村出土
五、五千年前の彩文土器、山西萬泉縣荊村出土
六、漢代の甗、蒲州東王村出土
七、唐代彩畫土器、蒲州東王村出土

七

山西の自然地理

小林倍一郎

地形と地質

東と南を大行、中條の山脈が走り、西は呂梁の山脈が走り、そして黄河を以て陝西と隔てられ、北は北支連脈に横切られる山西の輪廓は、略々長方形である。そしてこの長方形を山西高原といふ大まかな名前で呼ぶことは、非常に便利なことが多い。

併し、この地形の單位の大きさを認識してゐない内地からの旅行者には、『高原といつても、山ばかりぢやないか』と云つた風な發見を、今更にする人があるかと思ふと『山國と聞いてゐたけれども平地も相當に廣い』などと云つて、地形名詞の尺度に迷ひ出したりする人もゐる。約二十五萬四千方粁といふ山西は、朝鮮や本州よりも稍々大きい位であるから、その中には幾つもの山脈、高原があり、相當に大きな盆地もあるのである。

モイヤーが山西の地形を山嶺、平原、黄土及び紅色粘土の盆地と高原といふ風に分けてゐるのは面白いと思はれるから、これに從つて以下敷衍をしてみる。但しその名稱の不適や誤謬に就ては訂正して行くこととする。

まづ山嶺は古生代及び寒武利亞紀以前の結晶性岩石――この云ひ方はあまり正確でなく、筆者はオルドウイス紀以前の石灰岩層及びそれ以前の變質岩と訂正したい――は極めて嶮阻な高峯峻岳になつて居り、石炭紀以後中生代にかけての各種頁岩、砂岩、板岩から成る地層は、比較的に低い圓頂の地形を示してゐる。前者の例としては變質岩から成る五臺山、霍山、方山、石灰岩から成る恒山、崞山、繫舟山及び娘子關附近の亙峰が擧げられる。この變質岩は普通泰山系片麻岩と五台系結晶片岩に分けられ、其の正確な時代は最近新らしい研究が加へられつつある。

從來泰山系を最も古いものとして、五台系はそれより新らしいものと見られてゐたが、その點變質作用の研究から檢討が加へられてゐて、或は泰山系との接觸によつて、五台系が變質したらしい論據も見出されてゐる。そして從來擬せられてゐた兩者の時代の區切り方も、大いに見直さなければならなくなつてゐるけれども、普通時代の詳しい區分を呼ばずに前寒武利亞紀と云つた程度の大まかな呼び方をした方が間違ひない處である。

石灰岩は、震旦紀(南口石灰岩)……例、崞山、寒武利亞―奥陶維斯紀(繫舟石灰岩)……繫舟山、太行山、奥陶維斯紀……娘子關附近の山などがある。そしてこれらの中には屢々石膏が挾まれて居て、山西の一資源となつてゐるが、石灰岩自體も石材の外、セメント、製鐵等の原料として、無盡藏に近いその豐かさは賴母しい限りと思はれる。

石炭紀以後の古、中生代層群は、前者と一見して地形を區別し得る程であるが、更に特色とするところは、その間によく赤色岩層を挾んでゐて、それに接してよく石炭が見出されることである。又その中の石炭紀赤色岩層の下部は奥陶維斯紀石灰岩の上に乗るわけになるが、その下部に鐵鑛が抱かれてゐる。かくて山西の二大重要資源である石炭と鐵は、この圓頂丘陵の地形の中から與へられてゐるのである。更に面白いのは石炭層の上下によく見られ

内容

第四卷・十月號

る頁岩層が、また到る處で陶磁の原料にされて居り、一部は土法製鐵用の坩堝が作られてゐることである。以上二者を合はした山嶺區が、全省の約六十五%を占めてゐるといはれる。

・モイヤーの言ふ黃土及び紅色粘土の盆地及び高原といふのは、右二者に續く山麓の土層堆積原で、山西の最も特徵的な部分と云へようと思ふ。正確に云へば第三紀以後の新生代土層堆積で赤色粘土、帶赤色粘土及び黃土を主とする。これ等は、間もなく洗ひ流されるやうな高山にはあまり殘されなくて山下によく發達したものを思はれるが槪して北西風に對して風下の側によりよく發達する。そのよく長い裾野の樣な緩斜面が延びてゐて、漸次盆地に下る有樣は、高燥な『黃土高原』といふ名稱を自ら想ひ起させるものである。併しこの山麓型土層堆積原は、全省の十乃至十五%に過ぎないので、中には厚く堆積した黃土の、途徹もなく茫寞として廣い高原を想像して來た人々は說明に困らされることがある。併し波打つ丘を覆ひ、山麓にエプロンを掛けた樣に展開する堆積景は、確かに山西らしいものである。其處には特有の侵蝕景―地隙が大きな口をあけて居り、美しい階段耕作の圖樣が丹念に描かれてゐる。

この外高原らしい處を探すならば、五寨奇嵐方面の西北部では、古い侵蝕面と思はれる極めて起伏の小さい地域がある。ここでも更に黃土や赤色土層が、これを覆うてゐる。

黃土などの土層堆積は古期岩層の樣な地下資源――鑛物を提供してくれなかつたが、この次に述べるべき沖積原土の平原と共に、人類の主なる活躍場であつた。住むことも食ふことも、或は直接、或は間接、みな黃土に賴る處が大きかつた。穴居の今尙見られるのもこの種の地形に限られる。

第三は平原であるが、中央地溝帶に連る諸盆地を初め、潞安其他には、殆んど平坦な沖積原が展開する。殊に太原盆地は長さ(東北――西南)百二十餘粁、幅四十粁前後あり、極めて緩傾斜である。尤もその中を流れる汾河兩岸の狹い(一二粁程度)新沖積原とそれより高い古期堆積との間には十數米の較差があり、特に平陽盆地から下の汾河は、兩者の關係がはつきりと段丘の上と下に分れてゐて、この段丘の崖を走る列車などからは崖上の古期堆積は見えなくて、汾河の谷とは狹いものだといふ風な錯覺を起す人がある。

時にはこの古期堆積原も、すぐ下に第三紀や中生層が頭を出してゐることもあるが、大同や太原の場面は三門期と思はれてゐる。

この平原はその土壤の肥沃さに加へ河流による灌漑に惠まれる。忻縣、定襄縣に見る滹沱河水の利用はその適例である。更に地溝帶の兩側を劃する斷層地帶に沿うて、よく地下水の自噴があり、その泉流がまた灌漑を助ける。晋祠や廣勝寺の泉は、交城、淸源、洪洞など諸縣下の他の多くの泉と共に、水田、麥、瓜類、蔬菜などの栽培を盛ならしめた。また地下水面も三、四十尺より淺いことが普通で、井戸水灌漑も到る處可能である。かくの如く惠まれた盆地底に、古代支那の文化が發生したといふことは、日本の高千穗文化と比較して興味あることである。

この平坦部は全省の二十乃至二十五%と推定されてゐる。

最後に山西の高度を概觀すると、山嶺では北東の五台が三千米を越えるのは特別であるが、千五百から二千五百の間の峯頂が多く、一般に北に高く南に低い。盆地底は北部で八百乃至千米中部の太原盆地が五百餘乃至八百餘米南部は三百餘から四百米未滿といふ程度で、盆地底南北の差、約六七百米となる。

氣候と土壤

西部支那高地東緣の一角を占める山西は、丁度夏季海洋性氣塊の北伸する邊域に當るので、興味ある氣候區を示す。そして海洋性氣塊の强さに應じて南東の大行山地にのみ雨を齎すが、或は降雨線が北に振れて、大同盆地や河套に及ぶ樣なこともあつて、その中間の山西は年によつて可なりの差が生ずる。然してこの山西附近で夏季海洋性熱帶氣塊(或る程度變質したもの)が他種の氣塊と接することが多くて降雨を見るのである。

右の事情に加へて地形の影響が强く殊に南東斜面の大行山地が夏季降雨の發生條件に適する。又高度の大きなことが降雨を誘致し易く、夏期は、主として暴雨性のものが多いけれども、春などは、春雨式のものが華北平原よりも多く降る。これは、山西の春蒔作物に取つてどれだけ有難いものか分らない。

併し年量にして、五百數十粍から四百粍前後しか降らない、山西の雨が夏に集中して降ることは、北支一般と同じく、生長期にある作物にとつての恩惠である。

この夏期集中の降雨も貯水して置いたら、秋にも更に來年の春の種蒔にも大いに利用されると一應は思はれるであらう。併し山西では、灌漑用の貯水池を殆んど見受けない。けれども、こ

れは農民の愚かさと直ちに輕く笑へない。何となれば山西の蒸發量は、雨量の四倍以上（太原の示數）で、千六百粍餘であるから（黄土質の池底の滲透量を考へなくとも、二米に近い深さの水は失はれるであらうし、更に滲透量を考へたら、恐らく數米の深さの水は徒らに失はれると思はれる。だから、餘程基盤に惠まれた處に、近代式の大規模で、相當の流量の河水を引いて計畫されねばならず、支那の農民及び農業事情は、それを到底不可能なことだと思はせたであらうし、それ程大きな河水の、一部地域への利用は、下流の農民との交渉を甚だ五月蠅いものにしたであらう。畢竟社會政治的な文化條件の窒息狀態が、この自然條件（旺盛なる蒸發）を克服せしめるには、餘りに憐れなものであつたのである。

溫度の點では一般に高原性の特色を示し、概して華北平原に比し低溫で、多も寒いが夏も亦涼しい。春の來ること晚く、且つ來るや溫度は急昇して去ること早く夏季に入り、秋も氣溫の降下は可なりに早い。

北高南低の大勢は、氣溫の緯度變化（北より南へ高くなるべき）を更に助長する。北部と南部では年平均氣溫で五度、一月は八度に近い差があり、盆地底と山嶺間では海拔の差から各々相當の差を生ずる。

實際の雨量や氣溫の分布は、極めて複雜であるが、大體、東南斜面（大行山地）北部、中部、南部の盆地、山麓原及び山嶺區といふ風に分けて說明すると便利である。

東南斜面の雨期は勿論春季の降雨も比較的多くて、恐らく北支で最も珍しい多濕多雨區に當る。記錄の利用し得るものは五百三四十粍の年量しか示さないが、それは盆地底のものであつて、山地はより多くのものが考へられる。そして夏季以外に殊に春季の雨も他に比して割合に多い。

このために、土壤は可なり石灰分を洗脫された、微石灰質紅色土になつてゐて、山東褐色土に近い。その紅色を帶びることは、黄土の下の赤色土層が南する程多くなるために、この南東地區では露出部が甚だ廣くなつて來るからである。この土壤條件と雨量と、そして比較的高い氣溫とは、玉蜀黍や高粱をより多く栽培せしめて居り、また竹や里芋、生姜の樣な作物を見受けたりするのである。

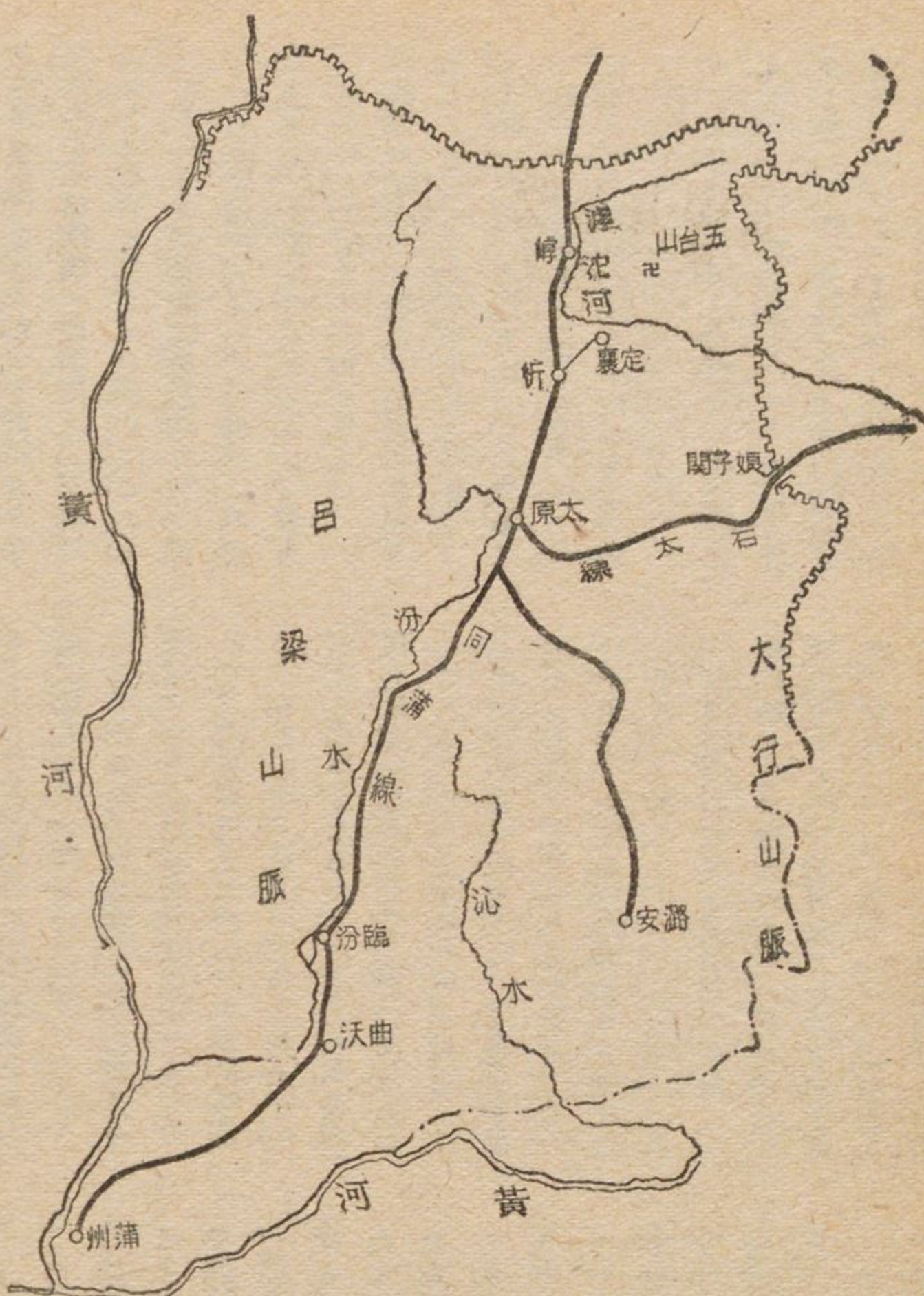
南部盆地の氣溫は前者と大差なく、年平均で東京附近に近く（但し一月は零下二—五度、七月は二十六—二十八度で較差はずつと大きい）。けれども雨量は四百四五十粍程度で可なりに劣る。これと中部盆地（年平均氣溫十一度前後—仙臺あたり、年雨量四百粍前後）とは氣溫の差が目立つ、殊に春期の上昇の差は著しく、多麥や菜種の生長の違ひに驚かされることがある。又大體灰褐色土に屬すると云はれる兩者の間にも、若干の差があり、南の方が暗赤褐色素を加へて來る。これは赤色土層の影響によると思はれる。

南部盆地の高溫は、北西の地域に見ない二三の特色をその景觀に持つてゐる、それは麥、棉、煙草作の卓越であり、多蒔菜種の北限であることである。これは、無霜日數が中部では一七〇日前後なのに南部では二三〇日位になることと對照してみると面白い。特に棉や煙草は現金作物として注目されるものであるが、中部の盆地に行くと氣溫などの條件から見て、既に北限に近いために南部の樣に發達してゐない。また水田耕作も可なり行はれてゐる。

尙、この二盆地では、果樹の良質のものが多く、葡萄と胡桃と杏はその意味に於ける代表である。また汾河の河原を利用した棗の栽培や、畑の中の柿の木の散點するのも特色ある風景と思はれる。

×

忻縣、定襄附近の盆地までは、同じく灰褐色土壤であるが、氣溫も漸く低

くなる。そして、より特徴的なのは、平定附近の盆地と共に、中部盆地より却て雨の多いことで、このためにモイヤーなどはこの地區を東南部に入れてゐる。忻縣以北の盆地は、由來蒙疆に對して移民、取引等の點に於て依存度が強く、本地域の栽培によるもの他南東地區よりも多數移入して、蒙疆へ中繼してゐた。從つて農具などの手工品と共に蔬菜の栽培は比較的盛んで、その種子も多數北送されたもので、これはまた他面、灌漑水利の便に負ふ處が多い。滹沱河を更に代縣や繁峙の谷へ遡ると、氣溫も更に下るので、水稻の移植を行つてゐない（種蒔）し、菜種は春蒔きされる樣になる。

また中部盆地では、高粱が卓越して來るのが、南部盆地に對して目立つた景觀である。と同時に中部盆地の北方から北部大同盆地へかけては、低溫な氣候條件に支配されて蕎麥、金針菜、除蟲菊などの栽培が卓越して來る。因みに大同盆地はもつと磽質で、褐灰色の、やや生産力の弱い土壤になつてゐる。

山麓原の黃灰色土壤（黃土）では、盆地底より排水よく乾燥し易いので、耐旱の高い粟作が卓越する。この山西に於ける粟作の高粱に比しての卓越は蓋しこの山麓原の地形的性格と、山西の寡雨性（東南斜面を除く）に由るものであらう。

これより更に山嶺區に入ると、黃土質の堆積は斑狀で且つ薄く、その低溫で多濕な氣候條件の下では、栗色土に發達したり、黑色土になつてゐる土壤を見出す。殊に山嶺の北斜面ではこの種暗色土の發達がよくて、樅などの森林を持つてゐるが、その間パッチ狀に開かれた山腹の畑や、山谷の磧原の間に堆積した沖積質暗色土の畑では、菜種、蕎麥、馬鈴薯が栽培される。蓋し前二者は低溫地帶の作物であり、馬鈴薯はやや洗脱された土壤が適したからであらう。そしてこれ等が山間に蠢く少からぬ農民に澱粉と食料油（一部は燈油）を提供してゐるわけである。

（筆者は華北交通資業局員）

山西歴史景観

小野勝年

同蒲線

同蒲線は山西省を南北に縦貫する交通上の大動脈である。從つてその沿線の歴史景観は山西の歴史を概觀することともなる。

蓋し山西省の南部は支那最古の文明の發祥地とも云ふ可く、堯舜禹の都は悉く黃河と汾水とに圍まれたこの地域に位置して居る。卽ち堯は平陽に都し、舜は蒲坂に都し、禹は安邑(夏縣)に都した。

古典の傳ふる所に依れば、堯舜は唯だ自己一代帝位に卽いたのみで、その位を子孫に傳へるには至らなかつたが禹は夏王朝を開き、桀の時、殷の湯王に滅される迄、十七君十四世に及んだと云ふ。

以上は果して如何なる程度迄史實として信用出來得るか問題で、堯舜のことは勿論のこと、夏王朝の存在に就ても傳說的色彩は甚だ濃厚である。

然しながら注意すべきことは、それらの都が悉く汾水と黃河とで圍まれた地域、卽ち山西南部、謂ゆる河東に位置して居たと稱せられる點である。

この地は、夏王朝に繼いで興つた殷及び周の中心地である河內、河南の地方に鼎立し、古文化の發展に適した條件を具備して居たことは勿論である。

降つて周代には、この地に晉と呼ぶ國が現れた。晉は傳ふるところに依ると周の成王の弟、叔虞が封ぜられた國で、初めは唐と稱した。當初、都のあつたのは、翼城縣の西方だつたといふ(一說には太原縣とも云ふ)が、後に翼(翼城縣)に遷り、更に絳(一に新絳縣北とも云ふ)に遷り、其處から再び曲沃に轉じた。これらの位置もまた云ふ迄もなく悉く河東に屬してゐる。

偖て、晉もまた初めは微々たる國に過ぎなかつたが、漸次勢力を得て領土を擴大し、獻公時代には汾水を北進して赤狄を討伐するに至つた。赤狄とは汾水上流以北の地に居た遊牧生活の民族だつたと解せられる。

農耕文化を基調とする晉は、かくて遊牧民を壓迫し、或は驅逐し、或は歸農せしめて、その領域を雁門以北にまで擴張したであらう。

獻公の子が文公である。文公は春秋五覇の一人として數へられる人で、その時代に至ると諸侯を招集して斷然中原を制壓した。然るにその後、國內に於ける貴族の勢力擡頭となり、韓・魏・趙の三家のために遂に主家の領土は分割され、遂に滅亡せざるを得なかつた。その結果、山西省も南北に分割され、南部は魏に屬し、北部は趙に領せられた。これが春秋戰國を劃する大事件である。

かくて北部を領有した趙は、その北邊に於て匈奴・樓煩等と稱する遊牧民族に境を接することとなり、彼等の侵入を禦がんがために長城を築いた。又彼等との接觸の結果、騎馬戰術の如きが新たに輸入され、これが戰國末期隣邦の秦にも傚はれることとなり、秦の天下統一に際して大きな武力的役割を果したのであつた。

秦は天下統一を完成するや匈奴を逐ひ、彼等の侵入を禦がんがため、燕や趙の長城を改修して萬里の長城を築いたことは餘りにも有名である。また郡縣制を施行し、山西省は太原・河東・上黨・雲中・雁門・代の諸郡に分ち、銳意この方面の經營にも努めたのであつた。然し始皇帝の崩御の後、天下再び亂れ、この間に乘じた匈奴が又南下を企てるに至つた。此の時中原に於ては漢の高祖の制覇となり、その南下を防止することとなつたので、匈奴と漢との大衝突が惹起され、その際自ら討伐軍の先登に立つた高祖が大同の東南にある白登山に於て匈奴軍のために圍まれ、纔かに身を以て免かれたことは有名な話として傳へられて居る。この後、兩者間に於ける抗爭には一弛一張があつたが、常に雁門以北、卽ち晉北地方の爭奪が問題となり、武帝の時にも今の朔縣地方を回復せんとして失敗した。これが例の張騫を派し、西域諸國と同盟して匈奴を挾擊せんとする計畫の企てられた直接原因である。

其の後、後漢に至るも兩者對立の形勢は變らず、晉北地方は殆んど匈奴の支配下に屬してゐた。

降つて三國以降、匈奴は更に南下し

太原・汾州地方に迄入りこみ、その姓をも支那風に劉と云ひ、五部族に分れて占據して居た。それが西晉の内訌、諸王の叛亂に際して雄飛するの機會となり、遂に惠帝の永興元年（西暦三〇四）劉淵なる者に統率されることとなつた。

彼は左國城（離石）に於て位に即き漢王と號し、更に南下して平陽に都し自ら位を進めて帝と稱するに至つた。

これが即ち五胡十六國時代の最初であり、以後南北朝時代を通じて約二百七十年間、山西省の地は北方遊牧出身の民族の支配下に屬することとなるのである。即ち漢に繼いで興つた石勒の後趙、苻堅の前秦、慕容垂の後燕等が交ゝ立つてこの地を治めた。

彼等は或は匈奴、或は鮮卑、或は氐羌出身の異種族であつたのである。

當時、爭奪占據の中心地となつたのは晉陽・平陽・長子（潞安）等であつたが、これら諸胡の勢力を統一し、江南に據つた漢族の國家と相對した。

鮮卑族出身者に據つて建てられた北魏は、平城に都するや大いに佛事を興して寺院を營んだ。雲岡石窟は今日に殘された當時の最大の記念物であるが更に洛陽に至つて再び龍門にも營んで居る。かく石窟寺院を造營することは勿論北魏が最初のものではないが、この時代が史上最も盛んであつたと云ひ得る。龍門では北魏以降隋唐に及ぶ迄繼續され、これと共に注意すべきは晉陽に近い天龍山の石窟である。即ちここもまた北齊以後、唐代に亘つて開鑿されたのであつた。

晉陽と云へば北魏以後特に重要な軍事的中心地であつた。北魏を衰亡に赴かしめた爾朱氏、北齊を建てた高氏は悉く此處に根據を置き、更に興味深いことは唐の太宗が父（高祖）にすすめて義兵を擧げた場所も即ち晉陽であり天下統一後、北都と稱した。

唐の中葉以後、さしもの世界的大帝國もその威力は衰へ初めた。安史の亂に依つて北支は全く荒廢し、かくてこの頃晉北を根據として南下の機をねらつて居た土耳古族系の沙陀部の擡頭となる。その主領が李國昌で、子の李克用は、晉陽に據つて軍閥的勢力を振ひ降つて五代には、同部出身の劉知遠がここに獨立して帝位に即き、漢と號したのであつた。

五代五十年の混亂は宋の統一となつたが晉北地方は契丹（遼）の領有であつて、遂に漢族の統括に歸することが出來なかつた。猶、此の時代注意すべきは、晉陽が衰へて新たに陽曲縣城が政治の中心として榮え初めたことである。陽曲縣城とは、今日の太原のことで、晉陽は今の太原縣内に位置し稍ゝ場所を異にする。それと共に、解州の鹽が特に經濟的政治的意味に於て重要視され初めたことである。

偖て、遼に代つた金は前代同樣、政治的中心を西京たる大同に置いたが、その領有は云ふ迄もなく、山西省全土に及んだ。當時平陽が印刷の中心地で潞安出身の崔法珍と云ふ女性の熱狂的信仰と發願とに依り、五千五百卷に及ぶ大藏經が刊行され、この經本が趙城縣の廣勝寺に於て近時發見されたことは、山西文化の一面を語るものであらう。

それは勿論、同省内に在る五臺山が北魏以來、文殊菩薩の靈場としてアジヤ佛教圏内に於ける共通的聖地となつて居る意義に比較するならば、稍ゝ遜るかも知れないが決して看過さる可きではない。

元の統治となるや、五臺山には喇嘛教も行はれる樣になつたこと、或は又山西地方が三路に分かたれて、中書省に直隷したと云ふ樣なこともある。更に明代山西行中書省（後に山西布政使司）が置かれたこと、及び清代山西省の區劃が確定した等、擧げれば記す可きもの尠くはない。然しここでは唯だ民國以降多少の變遷こそあれ、閻錫山が政權を握り、謂ゆる山西モンロー主義を唱へ、政治經濟產業等の發達を計畫し、その開發促進に努めつつあつたことを記すに止めよう。然し彼の事業は例へば交通上に於ても直ちに窺はれる如く、狹軌の輕便鐵道敷設を行ふと云つた次第で、清代支那金融界を制壓した山西人が漸次浙江財閥に壓倒されつつあつたことと合せ、その方法は猶保守的傾向を脱し得ないものであつたと概評し得る。

石太線

山西と河北との間には大行山脈が恰も脊骨の樣に横り、これに依つて自然の境界が形成され、兩者の交通もこのため甚だ制約を蒙つて居る。然しこの山脈を開析して流れる桑乾・滹沱或は漳河の流域に沿ひ、更に又さうした大河でなくても、山脈の所々には切目があり、これを通じて彼我の交通が古く

から行はれてゐる。

石太鐵道の敷設もまたかかる古來の交通路の一に依つたものであることは云ふまでもなく、而もこれは山西の中心たる太原と河北の心臓とを結ぶ重要幹線なのである。

されば平時に於ては、兎に角として一度戰爭の行はれる樣な場合にはかかる交通路の把握が直ちに問題となり、この間に横はる關門は閉鎖され、且つ又この嶮隘を約することが軍略上最も重要であつた。從つて娘子關或ひは井陘關の如きは古くよりその名を知られ前者が今次事變に依つて皇軍苦鬪の地として忘る可らざるところであるは勿論、後者又「股潜り」を以て膾炙された韓信が山西軍を率ゐ、ここに據つた陳餘二十萬の河北軍を破り、漢の天下統一の根本的契機を作つてゐる。否これより以前、春秋時代に於て、晋は屢屢井陘を下り、鮮虞・肥鼓等の夷狄を征め、戰國時代には、趙がまた此處より進出し、山西河北に亘る大國を營んだ。

その後秦の始皇は王翦に命じ、井陘を降つて趙を攻めしめ、降つて東晉時代には後燕の慕容潜が井陘を溯つて晉陽に攻入つてゐる。更に又、唐末安史の大亂に際しては李光弼が此處を下つて常山を陥れ、北漢を滅した宋の太祖も亦此處を通過し、正定に立寄つて居るのである。

偖て、晉陽とは今日の太原地方であの在つたところとも云はれるが、それは暫く論外として、戰國時代一時趙の都の在つた地方であり、以後も常に政治軍事的中心地として榮え、特に南北朝時代には北方民族發展の重要據點でもあつた。

降つて唐の高祖はこの地で義兵を擧げ、隋に向つて反旗をひるがへし、天下統一後此處をば北都とか北京とか稱してをり、五代の北漢もまた此處に都を奠めた。但し、その地は現在の太原とは稍〻相違し、西南數十支里を距つて居る。

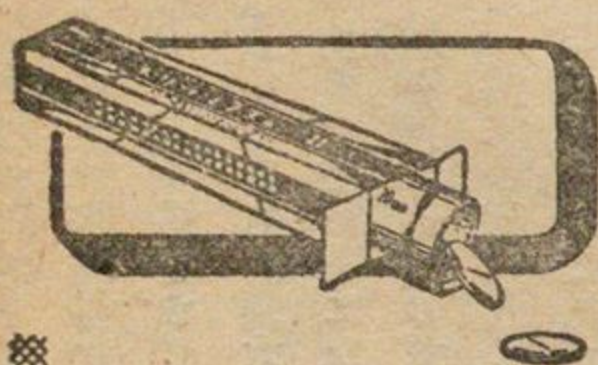
卽ち今の太原は陽曲縣治の所在地であり、ここが殷盛に赴いたのは北宋以來のことに屬し、爾來山西の中心地となつたのである。而して今次事變までは閻錫山が謂ゆる山西モンロー主義の據點として居たことは餘りにも有名であらう。

更に李光弼に依つて陥れられた常山とはこれ亦河北の重鎭たる正定のことである。正定は一に眞定とも云ひ漢代以來の名稱であるが、その間常山とか恒州或は鎭州などとも呼ばれたことがあり、滹沱河に臨んだ政治軍事交通上の重要地點である。

安史の大亂以後は成德軍節度使の所在地とし軍閥の根據地となり、婉然獨立國の觀を呈して居た。更に宋より清に至る迄屢〻著名な歷史事件の發生したことも看過し難く、京漢線が開通しその後石太線が敷設される樣になつて以來、寒村石家莊にその繁榮と重要性とを奪はれてしまつたが、それ迄は河北に於ける屈指の都城であつたのである。

惟ふに、石太線の敷設は山西省に於ける鐵、石炭等の鑛產開發を主要目的としたもので、露佛等の外國資本を俟つて具現の運びとなつたものであることは云ふまでもないが、これが唯だ經濟開發に貢獻しつつあるのみならず、嘗てこの交通幹線が政治軍事文化上重要な意味を有してゐたと同樣、否それを遙かに凌駕した使命を有することは否めない。

卑近な一例を擧げると、千數百年の歷史を有する國際的靈場五臺山巡禮の如きも亦この鐵道の恩惠を蒙ること尠なからざるものがあるのである。

（筆者・華北交通資業局員）

山西

村落に文化を運ぶ人々

直江廣治

此度山西學術調査研究團の一員として民俗方面の調査を擔當し、軍當局の絶大な御援助の下に、晉南九ヶ所、五臺山麓十一ヶ所に於て各種の民間傳承を採集する事が出來た。ここに資料の一部を整理し、各種の文化運搬者を中心として山西村落文化の從來殆んど顧みられなかつた一面を考へてみたい。

山西では散村の形態を採つた村落は全く見受けられない。村々は山河其他の地物を利用するか、或は華北の他の地方よりも更に高い障壁を圍らして殊更に周圍との交通を絶つてゐる。更に山西そのものが太行山脈と黃河といふ自然の障壁內に閉鎖されてゐるのである。かかる環境の下に我々は屢々流動性の無い固定した山西の文化を想像しまた村落文化の孤立性を強く意識し勝ちである。併し、さうした考へは、或る程度まで訂正を要するものと思はれる。即ち山西の村落生活は確かに一面に於て孤立的であるが、他の半面に於て、遙かに離れた地方、特に山西以外の地方との間に絶えず文化の交流が行はれてゐたのである。

この交流媒介者は、或る場所に定住して媒介する者と、移動して歩く媒介者とに分けることが出來る。前者に關しては、住民の移住並びに出稼ぎに就て考察しなければならない。これが村落文化に與へた影響は決して小ではないのであるが、この點は改めて論ずることにして、ここでは省略し、後者移動して歩く媒介者たる旅職工、行商人、旅廻りの藝人、信仰旅行者等の代表的なものに限つて述べることにする。

第一の旅職工に屬する者に鐵匠（鍛冶屋）がある。大谷では、事變前まで河南から三、四人一緒にやつて來て、城內の安い房子を借りて仕事をし、また田舍廻りに出たりしてゐた。ここの鐵匠は、山東からも來たと云はれてゐる。臨汾附近の劉村では、河南から來て三四年住んでは歸つて行つた。

虞鄕の北の南梯村では、二、三月頃河南から來て、十月頃去るのが每年の慣はしであつた。蒲州の鐵匠も大勢で河南から來て、大部分は更に田舍の村に入つて行つたさうである。尙、蒲州では木匠（大工）や燒磚人（煉瓦燒き）も河南人であつたと傳へてゐる。即ち晉南地區では、事變前まで鐵匠は河南人と決つてゐたやうで、彼等の間には或る程度まで繩張りの協定も出來てゐたらしい。

五臺山麓にみると、これは定襄の鐵匠の繩張りとなつてゐる。定襄縣の王進村、趙家營、龍門村、神山村等は、鐵匠の本場で、彼等は土地を持つてゐても小作に出して、自分達はその特殊の技術によつて山麓の村々を廻つて歩き、正月近くになると故鄕に歸つて來るのである。ここに興味あることは、定襄の鐵匠の技術を以てしても出來ないものがある。それは鐵鍋の製作修理であつて、これは河南或は山東の鐵匠の手に待たねばならぬさうである。從つて定襄の鐵匠の繩張りでも、河南の鐵匠はその特殊の技能を以て進出してゐるのである。

例へば、五臺縣城附近は定襄神山村の鐵匠の繩張りであるが、鐵鍋修理の鐵匠は、河南省武安縣から二月頃來て十一月頃歸るまで、此の附近の村落を步いてゐる。舊太原でも鐵匠は河南が主で、その手になる鐵鍋は「固漏」の稱を得てゐるのである。

第二の行商人に屬するものとして、賣藥的（藥賣り）に就て考へてみる。劉村では事變前、二、三月と七、八月の二回、河南洛陽から賣藥的が廻つて來た。藥を賣るだけでなく、治病の法も行ひ、土地の人は南蠻子と呼んでゐた。運城の近くの曲庄頭でもやはり南蠻子と呼んでゐるが、四月頃やつて來て、時とすると半月位も滯在してゐることがあつた。

有名な解州の關帝廟の四月會では、大規模な市が立ち、特に藥材の取引が盛んに行はれるが、以前には河南、河北、陝西、四川の各地から賣藥的が集つて來て藥材の交換も行はれ、更に彼等は各地村落へと旅廻りに出た。

南梯村でも河南から三月頃やつて來て、看病も行つた。蒲州では河南の禹州から來たさうで、何れも南蠻子と呼ばれてゐた。

五臺山麓になると、繁峙では四、五月頃に四人位一緒にやつて來て、二箇月ばかり滯在してゐた。河南、湖南、

廣西の者で、看相面（人相見）もやつたり、針を使つて治病も行つた。太原經由で來て河北方面に抜けて行つたさうで、矢張り南蠻子と村人に呼ばれてゐた。代縣では、四月頃河南の彰德から來て南蠻子と俗に呼んでゐた。

崞縣、定襄では河北、山東から來て兼ねて治病も行ふので野太醫と呼ばれてゐるが、今でも廻つて來るさうである。五臺では河北の祁州から來て看病も行ひ、野太醫と呼ばれる。舊太原では、河南懷慶から來て針も使ひ、野太夫と呼ばれてゐる。

以上の資料から、五臺山麓の一部では河北、山東の賣藥的が進出してゐるが、それは事變以後河南方面の賣藥的が來なくなつたためであつて、嘗ては主として河南方面からの賣藥的が廣く山西の村々を訪れてゐたことが推定されるのである。

解州關帝廟の廟會がこの種、賣藥的の集合場所であつたことは興味あることである。また謂ゆる五臺藥草として賣り出されてゐるものの中には、此の種南蠻子、野太醫によつてもたらされたものが若干あるものと私などは考へてゐる。

それは、兎も角として山西の賣藥的は、內地越中の反魂丹行商と軌を一にするもので富山の薬賣りが毎年その細張りである行商地域に對して種々の文化的影響を與へた如く、賣藥的もあの高い障壁を圍らした山西の村々にさまざまの知識を運込んでゐたのである。彼等が俗に南蠻子と呼ばれてゐた點は後に觸れる如く注意すべきである。

賣藥的に類するものに賣筆的（筆賣り）がある。これは晉南、五臺を通じて等しく矢張り南蠻子と呼ばれてゐる。五臺では、二月頃河南懷慶から來たさうで、筆鑽子と呼んでゐる。彼等はその名の示す如く筆も賣るがその他に書物小說類も賣つて步いたやうである。

第三の旅廻りの藝人として、說書的（講釋師）がある。既に南宋時代の記錄に說書人が市井の瓦子（講釋場）に據つて民衆に慰安記錄の傳へる以前より存在してゐた事は想像に難くないのであつて、語り物の起源は極めて古いのである。都市には繁華を當て込んだ常住の說書的がゐるが、實際は田舍わたらひが普通であつた。

大谷では以前、河南の南陽から年に一度來ては一と月位滯在して人々の求めに應じて講釋した。三人連れで、一人は打鼓兒、卽ち木製の鼓を敲いて調子をとり、一人は胡弓を彈き、一人は瞎子（盲人）で、これが樂器に合せて唱ふが如く講釋した。講ずるものは三國志演義、關帝故事、水滸傳、彭公案、施公案、濟公案等が普通であつた。

劉村でも農暇期に河南の大名村からやつて來た。蒲州では河南から年に一度十一、十二月頃來たさうである。

五臺山麓になると、說書的はすべて河北省から入つて來る。崞縣では、うら若い姑娘であることもあるさうで、好んで「昭君和番」を講じたさうである。これは注目すべきで、王昭君に取材したその哀史は年若き姑娘の講ずるには相應しいテーマである。

定襄でも事變前に河北から十二、三歲の娘が父親と一緒にやつて來て二人で講じた。娘は「昭君出塞」を講ずることがあつたさうである。舊太原でも女の說書的のある事を聞いた。これに就いて思ひ合せられるのは、王昭君の傳說が西北一帶に分布してゐることである。その墓と傳へられるものだけでも大同府城の西北、金河縣の西北、歸化城南三十里の地等、枚擧に暇の無い程である。

內地で各地に廣く分布する和泉式部の遺跡が京都誓願寺を根據とする歌比丘尼や盲女の漂泊に關係ある如く、王昭君の遺跡も素朴な村人と強い印象を與へたであらう「昭君和番」なる哀史

語りのうら若い女性の流浪とに歸せしめるのは果して無理であらうか。

尙此の外に耍猴子(シユワホウズ)(猿廻し)がある。二人連れが普通で一匹の猿を背負つて村々を訪れて歩く。ここでは彼等が山東人であることを附記するに止める。

第四の信仰旅行者に關しては、五臺の六月大會に集る信徒の群が山麓の村落に與へる影響も見逃すことは出來ないが、ここでは村から村へと流浪する「風水先生」と「善書語り」に觸れるに止める。

風水信仰とは城、家屋、墓等を築く場合、最も地の理に叶つた建築をすると幸運を招き、子孫が高官に上るといつた調子の迷信的なもので、その專門家は山西では通常風水先生、或は陰陽先生と呼ばれてゐる。この風水先生はその土地の人間がなつてゐるのと、旅廻りのと二通りある。五臺山麓では事變前三、四月或は八、九月の候に江南から陰陽家がやつて來て看風水を行つた。そして土地の人は俗に南蠻子と呼んでゐた。

崞縣、原平鎭でも湖南、湖北からやつて來て南蠻子と呼ばれたが、看風水だけでなく、針を用ひ或は符咒を使つて治病も行つた。事變後は河北から來るやうになつたさうである。各地の斷片的な傳承を綜合して考へると事變前には遙か南方から來る旅廻りの風水先生が村落生活の迷信的な部分に可成りの勢力を持つてゐたことが察せられるのである。

さてここに注意すべきことは、この風水先生並びに前述した賣藥的、賣筆的が共に通常南蠻子なる語で呼ばれてゐることである。南方から來る此等田舍わたらひが嘗てはその數も多く、村落生活に與へた影響も決して少くなかつた一つの證據として、ここに南蠻子採寶譚に觸れて置く。山西では南蠻子の寶盜みといふ小傳說を各地で數多く採集することが出來た。

〔例一〕大谷の南に、鳳山なる山がある。そこには嘗て稀代の寶があつた。普通の者は氣付かなかつたが南蠻子は土地の中の寶を見拔く不思議な力があるので鳳山の寶を盜み去つた。

〔例二〕臨汾の鐵佛寺の塔上に純金の寶頂が美しく輝いてゐたが南蠻子が何時の間にかこれを嗅ぎつけて夜こつそり銅の合金とすり換へて盜み去つた。

〔例三〕定襄の北門に近く井戸があつた。昔その中に蛤蟆が住んでゐたがその鳴き聲は「戴官帽」といふ風に聞えた。實はそれは定襄から高官が澤山出る意味であつた。又石があつてそれは高官が出た時に官印に用ひられる筈であつた。所が南蠻子がこれを知つて井戸を埋めてしまつたので、風水が惡くなり印になるべき石が砧に變つてしまつた。それ以後定襄からは高官が出ずに鐵匠が出るやうになつたさうである。

澤山あるので山西の南蠻子採寶譚はこれ位にして置くが、實は此の傳說は山西から廣く華北一帶、更に滿洲の一部にまで擴つてゐるのであつて、我々同好の手に採集されたものだけでも七十を越えてゐる。而も各地でその傳承が少し宛異つてゐて、我々の興味もまたそこに懸けられてゐる。比較研究によつて此の傳說の原型を究め、更にそれが變化して現在に至つた變化の過程を明かにする事が出來るのである。

此の問題の奥行は一寸測り知る事の出來ぬ位深いのであつて、近く改めて此の傳說を詳細に論じてみたいと思つてゐるが、兎も角この南蠻子採寶譚と田舍わたらひの生きてゐる南蠻子とは決して無關係ではないことだけを附け加へて置く。

次に善書は卽ち勸善書の意でその唱道法を宣講と呼んでゐる。孝悌節義を强調し說唱に適するやうに句法を整へてあるものが多い。善書の種類は極めて多く私の知るだけでも百種は越えてゐる。今度も解州關帝廟の路傍で二十種ばかり購つて來ることが出來た。この善書は村の有識者が機會ある毎に文字の素養なき村人を集めて說唱して聽かせるのであるが又一方に路傍の漂泊の「善書語り」がある。舊太原で私は二人連れの旅の女の「善書語り」に出合つた。河北省順德の者で太原に泊つてゐて芝居と共に村々を訪れては生活の費を得てゐると警戒の目で答へた。

學校教育の普及と共に宣講の勢力の衰へるのは自らなる推移ではあるが、嘗て村落が目に一丁字無き者で充されながら而も道德生活が秩序正しく保たれ得た點に關して此の宣講の存在を忘れてはならない。

前代の農村教育を眞劍に考へようとする人が、此の善書に關心を向ける時が來るのは決して遠くはないと思ふ。而も善書の影響は現在も尙連綿として跡を絕つてはゐないのである。

最後に、善書の中に「關帝聖君覺生眞經」其他、關帝關係のものがあるのは注意すべきである。關帝信仰が邊鄙な村々にまでこれだけ普及し得たのには、前述の「說書的」に「善書語り」の漂泊があることを、忘れてはならない。誰も餘り注意を拂つてゐないやうであるが、此の方面に於ける彼等の貢獻は決して低く評價さるべきでないと私は考へてゐる。（筆者・輔仁大學講師）

山西省に因む劇

石原巖徹

ここに劇といふのは今日全盛の京劇を指す。山西省特有の劇に「山西梆子」といふ種類があり、梆子劇の內では最も高級であるが、これは今日蒙疆及び山西省內に多少行はれてゐる程度で非常に衰微してゐる。恐らくはこれも他の梆子劇と同じく時代にとりのこされて行く運命のものであらう。

京劇に仕組まれてゐる山西省關係のものを拾つてみると主なのが次の數種で、關係といつても殆んど單に地名が山西省內のものと言ふに過ぎず、內容には、特に山西の地方色といふべきものは無い。地理的順序で、北から南へ出る。

雁門關

北宋楊家將の物語の一部で、楊家の一族を奸計を以て滅亡させようとする潘洪が、楊家將の一人六郞の訴に依て雁門關から召び還へされる場面。主役は召還の使者呼必顯だが、この劇は今日演ずるものが無い。同じ劇名で、宋と遼との和議をめぐる物語を仕組んだのがある（一名「南北和」）。とにかく雁門關は中國と北方民族との交渉史上しばしば出て來る要衝である。

五臺山

前揭の楊家將の一人五郞延德は、潘洪の奸計と遼軍との交戰で一家離散の後五臺山に隱れて僧となつてゐた時、弟の六郞延昭が遼兵に追はれてそこに逃げこみ、兄弟久しぶりの對面をする。この劇も今日は餘り演ぜられない。

醉打山門

水滸傳の花形豪僧花和尙魯智深が五臺山の僧となつてゐた時、戒を破つて山を下り酩酊して歸ると、寺僧が入門を拒むので、大あばれにあばれるといふ一せつ。北京の名優郭壽臣の當り藝の一つだが、郭が隱退した今日はその後を繼ぐ者がまだ出ない。

晋陽宮

唐太祖李淵は晋陽宮（太原）を守備してゐた時、裴寂といふ者の勸めで隋の天下を倒すべく旗を擧げたのであるが、この時裴は計略を以て李淵を酒に醉はせ隋の煬帝の留守中を幸ひ、二人の妃を味方に引入れて、李淵と共に寢させ、醒めて驚いた李を、のつびきならぬ立場に追こむ。この場面が晋陽宮と題する劇であるが、同じ題名で內容の異つたのがある。その筋は、煬帝が李に對して百日の內に晋陽宮を造營することを命ずる。無理な命令なので李は惱むが、その子の世民（唐の太宗）は術士の來援を得て、神助によりそれを完成し、煬帝大に驚く。煬帝晋陽宮に親臨の日、隨行の猛將宇文化及の子成都は、武勇の譽高き李淵の四子玄覇に對して力くらべを挑む。帝以下群臣環視の中で兩人試合の結果、玄覇が勝ち、李家の聲望大いに揚るといふのである。前揭の方は、文戲だが、この方は武戲で、主役は李玄覇（前者は李淵）故名優楊小樓の當り藝で楊の歿後はこれも餘り演ずる者が無い。

燒棉山

晋の文公の忠臣介子堆が、文公卽位の後、恩賞に洩れた（文公の不注意）ことから、母を伴つて棉山といふ山に隱れた。後で他人の注意によりその失態を覺つた文公は、自ら棉山に赴いて介を探したが見つからぬ。孝行者だから山を燒けば母を助けるために出て來るだらうと思つて火を放つたが、頑固な介は、母もろ共燒け死んでしまつたといふ筋で、介が母と共に火中に投ずる際の悲壯な歌と所作は、鬼氣人に迫るものがあり、名劇たるを失はぬ。然し大體が地味なため、むづかしい割合に興行成績があがらないので、今日は演ずる者が殆ど無い。この棉山は後に介子堆の事蹟を紀念するために介山と改められた。卽ち同蒲線介休店の附近に在る山で、そこには介を祭る廟もある。（この物語の詳細は、「北支」昭和十七年三月號に載せてある）

玉堂春

山西洪洞縣の蘇三（一名玉堂春）といふ歌妓は書生王金龍と深い仲になつて、王が上京して勉學するに對し學資を送つて出世を待つた。ところが王の上京中、蘇三は土豪劣紳沈某に無理に落籍されて妾になる。沈の妻は他の男と通じて沈を毒殺しその罪を蘇三になすりつけて官に誣告する。蘇三は太原に送られて取調を受けるが、彼女の愛人王金龍は彼女の援助の功空しからずすでに巡按使に任官してゐて、はからずもその取調の擔當者となつた。然し取調には陪審官として布政使、按察使の兩人が立會つてゐる。傍に走り寄つて慰めてやりたい心を抑へて、さりげないふうを粧ひつつ訊問するのだが、ともすれば彼女に同情した口吻となるので、兩人の陪審官は承知しない。取調が進むに從つて彼女の氣の毒な運命と、眼の前に見る憐れな姿に王金龍の心は刀でゑぐられるやうだ。ゐたたまれなくなつて彼は不快のためしばらく下つて休息することを告げ、兩人の陪

審官に取調の續行を託する。陪審官が更に訊問してゆくうちに、彼女と王金龍との關係がほぼ判つて來たので、氣を利かしてこんどは兩人が疲れたからと下つて休息し王と替る。二人きりになると王は、彼女の傍に降りて行つて慰めてやり、そこで一應取調を終了する。劇は普通ここまでで終るが物語は無論蘇三の寃罪がはれてめでたしめでたしとなる。この劇はどうしたわけか今日非常に流行してゐて、大抵の有名な女形（花形）はみな爭つてこれを演じ、北京では毎日どこかの劇場でこの劇を演つてゐると言つても過言ではない。この物語は通じて演ずる場合と、「女起解」「三堂會審」と分けて演る場合とある。「女起解」は、蘇三が洪洞から太原へ護送される途上悲嘆の情を訴へる場面で專ら歌唱を聽く芝居、「三堂會審」は取調の場面で、問答歌唱等かなりバラエティに富む。なほ二人のなれそめのところは「廟會」又は「關王廟」として別の劇になつてゐるが、今日は餘り演らない。今日普通「玉堂春」の題名で演つてゐるのは「三堂會審」である。主役は無論蘇三でこれは花衫役（女形）として代表的な劇である。

搜孤救孤

一名を八義圖と云ふ。晉の景公の忠臣趙家の一門が奸臣屠岸賈のために殺害され、趙朔の子（趙武）もその難に遭はんとする時、趙の食客程嬰、杵臼の兩人がそれを救ける。卽ち程嬰は自分の子を趙の子の身替りとして差出し、趙の子を自分の子として育てる。杵臼は老年の故に死んでも惜しくないとて身替の子を連れて首陽山（今の蒲州縣內）に隱れ、程嬰をしてわざとそのことを屠に密告させる。屠はそれを眞に受けて山を搜し杵臼とその子（身替りの程嬰の子）を殺して安心する。そのために趙の子は安全に成長する（後日成人して仇を討ち晉の忠臣となる）といふ筋で、日本にも有名な「以て六尺の孤を託すべし」の故事成語の由來である。この劇は老生役（程嬰及び杵臼）のもので今日も相當演ぜられてゐる。

潞安州

宋と金の戰で、金軍兀朮の大軍を引受けた潞安州節度使陸登は、小孔明と云はれた文武兼備の名將で孤軍よく奮鬪したが、衆寡敵せず、金軍の猛攻に潞安の城危ふく、救を韓世忠、張叔夜等に求めたところ、その使者が金軍に捕はれて果さず、金の軍師哈迷蚩は韓世忠の使者に化けて陸の陣中に入り、攻陷の計をめぐらさんとしたが、陸登に看破され、鼻をそがれて追ひ返へされる。金軍さらばと總攻擊を開始し、つひに城は陷つた。兀朮が城內に入つて見ると、陸登夫妻は自刄し、一人の嬰兒を乳母が抱へて逃げまどつてゐる。不思議にも、すでにこと切れてゐながら大剛陸登の身體は地上に直立して倒れないでゐる。金軍にさるものありと知られた豪傑兀朮は、果してただの蠻手ではなかつた。英雄は英雄を知る、いたく陸登の忠烈に感激して、鄭重にその死體を禮拜し、そして遺兒は自分の手で立派に育てて見せると誓つた。その言葉が終ると、至誠が通じたか、はじめて死體は、パツタリと倒れたと云ふ。これがこの劇の筋で一名を「一門忠烈」とも云ふ。この劇は武生役のもので主役は無論陸登である。

なほ兀朮が引取つた遺兒は陸文龍と云ひ、父に劣らぬ豪傑となつて、一度は宋の岳飛軍と戰ふが、岳飛の部將王佐の苦心に依つて身の上を知らされ育ての親に對する恩義に惱みつつ、結局岳飛に投じて金軍と戰ふことになる。その物語は別に「八大錘」或は「王佐斷臂」といふ劇となつてをり、今日はこの後日譚の方が主として演ぜられてゐる。因みにこの物語は拙著「支那劇物語」に恩讐二代絡と題して詳しく書いてある。（筆者は華北交通資業局參與）

關帝

石橋丑雄

開市大吉・黃金萬兩・金銀滿堂等と吉祥と蓄財との夢を追ひながら、夜を日について稼ぎ續ける支那の人々に取つて、その希望を叶へその欲する所を成就せしめられるのみならず、其の靈驗もいとあらたかなる神様として、民衆信仰の大中心をなすものに關帝がある。支那の各地を旅行して何所へ行つても土地廟と關帝廟とを見ない所の無い事から考へてもその信仰圏の廣いことに驚かされるものがあるのみならずこの信仰は華僑によつて遠く海外にも齎らされて我が大阪にも天王寺の東門外には一座の關帝廟が存して居る。

關帝生前の名は關羽、今の山西省解縣の生れで一に山西關夫子とも稱せられる。三國志演義によると字壽長後に雲長と改むとあるけれども、三國史の蜀志や關帝全書には『字雲長。本字長生』としてある。又三國志演義に河東解良の人とあるのは、今の解縣邊が漢時代には春秋晉の解梁城から延いて、解良と稱せられて居たことに因るものの様で、晉の解梁城の故地は今の臨晉縣であつたと謂ふ。

關羽の相貌については、演義に身長九尺、髯の長さ二尺、面は重棗の如く脣は塗脂の若し、丹鳳の眼臥蠶の眉、相貌堂々威風凛々とあり、關帝全書には身長九尺六寸、髯の長さ一尺八寸、面は重棗の如く脣は丹砂の若し、鳳目蠶眉にして臉に七つの痣（黒子）ありとなつて居るが、今日各地の關帝廟に祀られて居る神像を見ると、朱面細眼に長髯を垂れて綠の袍を着せたものが多く、その左側には白面の青年勇將關平を配して之に神璽を持たしめ、右側は黒面勇猛の従士周倉を配して、之に靑龍偃月刀を持たせ、又その乘馬だつた赤兎馬は鹿毛と云ふよりも寧ろ赤色に近い駿馬で、普通その右の方に控へて居るのを例とする。

それから支那劇に出る關羽も亦大體に於て斯うした神像に似たる扮装を普通とする様で、一般に老生を以て扮するが其の顏を紅色に塗る所から特に紅生とも稱せられ、之に類するものに宋の太祖趙匡胤がある。尙ほ支那劇に現れる三國蜀の人々の扮装について之を色別にして見ると、劉備は黄・關羽は綠・張飛は黒・趙雲は白の袍を着けるのが例である。只關帝廟に見られる神像の冠は、それが伏魔大帝として祀られる時や關聖帝君として祀られて居る時などによつて異つて居る様である。それから關帝全書や關帝聖蹟圖誌等に見える、臉に有つたと云ふ七つの黒子は、神像や劇の顏では判ませぬが、解縣の關帝廟にある五十八歲の時の像と云ふ石刻や聖蹟圖誌の神像には、之が判然と現はされて居る。

關羽が單に義勇絶倫の武將として只一介の武弁で無かつたことは、其の重厚なる言行の上からも察せられるところで、殊に平生好んで左氏春秋を讀み陣中と雖も之を手離さなかつた話は有名であるが、之は其の父祖が世々解梁の常平邨に住し、家に易傳と春秋とを傳へて居たと云ふから、幼時から斯うした物を讀んで居たものであらうし、彼の性格もそれに因つて大きな淘冶を受けたものであらう。また篆書を善くし好んで竹を描いたと傳へられて居るが、關帝信者の間には之を帝篆・帝竹と稱し、其の作に係ると云ふ雨竹・風竹の五絶の兩詩は、明の宣德年間に徐州の鐵佛寺の庭から掘り出された石刻と傳へられて居る。それから關羽の書いたと云ふ『三秦雄鎭』の四大字の額は、昔から荊州府の門上に掲げられて居たのを、明の萬曆初年に人が之を取り降ろした所、地震ふこと三日に及んだので大に怖れて、再び額を掲げたら地震忽ち止んだと傳へられて居る。

關羽の生年に就いては異說もあるけれども、後漢桓帝の延熹三年庚子六月に河東解梁の常平邨に於て生れたと云ふのが通說の様である。之から考へると涿州の桃園結義は二十四歲の時のことであるが、之より先き十九歲の時に夫人胡氏を娶つて長男の關平が生れて居る。涿州で劉備や張飛と初めて相見えた時に、鄕里の勢豪を殺して難を江湖に逃れてより既に五六年と語つて居るから、之は丁度關平の生後間も無い時の事であらう。後に下邳に破れて劉備の兩夫人を護りながら、曹操を助けて白馬の圍みを解き漢の壽亭侯に封ぜられたのが、獻帝の建安五年で四十一歲の時であつたが、劉備と共に河南隆中の草廬に諸葛孔明を三度訪れたのは實に四十八歲の時のことで、あの人口

に膾炙する當陽長板坡の戰や、赤壁の戰はその翌年四十九歲の時であり、特に撰ばれて華容道に敗退の曹操を捉ふることを命ぜられた時、昔の好みに義を立てて遂に之を逃れしめたのもこの年の事であつた。斯くて翌年の建安十四年には劉備は荊州の牧を領したが、次いで建安十六年五十二歲の時には劉備の益州征伐に出た後を承けて荊州の守備に任じ、爾後遂に身を終る迄荊州の守りに終始して居るが、この間建安二十年の夏に、單身呉の會に赴くの快擧を演じたことは有名な話で之は五十六歲の時の事であつた。

關羽の荊州鎭守に方つては終始江陵に據つて居たが、建安二十四年の七月に劉備が漢中の地を取つて漢中王を稱すると、關羽も前將軍に拜せられて節鉞を假され、軍を率ゐて北の方樊城に魏の曹仁を攻めたが、曹操の部將于禁の手に率ゐられた救援の七軍を、計を以て漢水に淹沒して于禁を捉へ、次いで魏將龐悳を斬つて勢威華夏に振ひ、遠近の群盜、或は遙かに之が印號を受け、或は來つて之が支援となるに至つた爲め、曹操は衆議を容れて都を許に遷し其の鋭鋒を避けざるを得ざるに至つた。玆に於て曹操は孫權に江南の地を與へて之に封じ、關羽をして之を圖らしむるの策を取つたが、孫權は更に呂蒙の計を用ひて陸遜を遣はし、大に關羽の功を稱ふるの書を送つて之を宥めたので、關羽は江陵の備を緩めて樊城に移したところを呂蒙は急に襲うて江陵を攻めた。之を聞いた關羽は急に樊城の圍みを解いて江陵に還らうとしたけれども、同地が旣に呂蒙の手に落ちてしまつた後なので、西の方にある麥城の小城に奔つたが、城中人馬少く且糧食も亦漸く盡きた爲め、城北の隘路を求めて逃れ出ようとする途中で伏兵の重圍に陷つて、呂蒙の部將馬忠の手に子の關平と共に捕へられてしまつた。建安二十四年（皇紀八七九年。神功皇后攝政の十九年）十月のことである。孫權之を聞いて喜ぶこと甚しく、親ら引見して降服を勸めたけれども、却つて『豈汝叛漢の賊と伍せんや』と一喝せられて引き下つたが、遂に部將の言に從つて之を斬つたのであつた。三國志演義には享年五十八歲とあり、關帝聖蹟圖誌にはこれを建安二十四年の十二月として居る。三國史の蜀志に據ると始め孫權がその子の爲めに、關羽の娘を娶らうとして使を遣はした時に、關羽が虎の子は犬の子に嫁せられぬと云つて使者を罵り、遂に婚を許さなかつたので、孫權大に怒り斯うした報復に出たものであつたと謂ふが、三國志演義によると其の後間もなく呂蒙が孫權の宴に招かれた時に、突如盃を地に擲つて一手に孫權を揪へながら、『碧眼の小兒紫髯の鼠輩還つて我を知れりや否や』と大聲叱咤しながら孫權を推し倒して、「我黃巾を破つてより天下に縱橫すること三十年、今圖らずも汝が奸計に陷る。我れ生きて汝が肉を啖ふこと能はざるも、死して當に呂賊の魂を追ふべし。我は乃ち漢の壽亭侯關雲長なり』と一喝すれば、孫權以下大小の將士何れも下つて之を拜する間に、呂蒙は七穴より血を流して死んだとあるが、之は全く呂蒙が關羽の死靈に憑かれた形である。

扨てこの關帝信仰が何時の頃から支那に始まつたものかは判明しないけれども、大體に於て關羽の歿後約八百餘年を經た北宋の初期頃からでは無いかと考へられる。之に就いて趙翼の陔餘叢考には『六朝唐宋。皆未有禋祀』（卷三五）として居るけれども、六朝梁陳の創建と傳へられる關羽示現の地として有名な、當陽縣玉泉山の顯烈廟の如きは別としても、武神としての關羽崇拜は旣に唐時代に存したもので、北宋の初め太祖・太宗・眞宗の頃には、地方的に關羽を祀る廟の建立を見たものの樣で、陝西省咸陽縣の關帝廟は太祖の開寶六年（皇紀一、六三三年）の創建（陝西通志卷二八）と謂はれ、山西省解州の崇寧宮は眞宗の大中祥符年間の重建（解州全志卷二）と傳へられる……關帝聖蹟圖誌にはこの廟の大中祥符甲寅七年（皇紀一、六七四年）の奉勅修建として居る……のみならず、北宋末からは關羽の追封が盛んに行はれて居る。之に就いて孫承澤の春明夢餘錄の所載（卷二三）に據ると、北宋徽宗の崇寧元年（皇紀一、七六二年）に關羽を忠惠公に追封し、更に大觀二年（皇紀一、七六八年）には武安王を加封して居るが、續いて宣和五年（皇紀一、七八三年）には勅して義勇武安王に封ぜられて居るから、徽宗の朝には約二十年の間に實に三回の勅封を見た譯で之に稽へても如何に當時關羽が重んぜられて居たかが判ると思ふが、後に高宗が臨安に即位して南宋を興してからも、建炎二年（皇紀一、七八八年）には壯繆義勇武安王に封ぜられ、ついで孝宗の淳熙十四年（皇紀一、八四七年）にも壯繆義勇武安英濟王と加封せられて居るし、降つて元の時には天曆元年（皇紀一、九八八年）に、顯靈威勇武安英濟王と加封せられて居る。然し之を國家的に祭祀する樣になつ

たのは明初からの樣で、即ち洪武二十七年（皇紀二、〇五四年）に之を京都の祀典に列した（大明會典卷九三）のに始まると見てよいかと思ふが、其の後萬曆二十二年（皇紀二、二五四年）には遂にこの爵を進めて帝に列し、同四十三年には三界伏魔大帝神威遠鎭天尊關聖帝君と勅封せられ（陔餘叢考卷三五）て居る。

更に清朝の時代になると世祖の順治九年（皇紀二、三一五年）から屢次の加封が行はれて、前後十數回に及んで居るのみならず、文宗の咸豐三年（皇紀二、五一三年）には其の祭祀を從來の羣祀から中祀に進められて居るが、清朝の斯うした關帝信仰は之を全く武神として崇拜したもので、清朝の滿洲勃興當初から關帝は大に其の靈驗を顯現して清軍に戰勝を與へて居るのみならず、清朝と關帝とは密接な關係にも結ばれて居る。尤も之は明代に盛んになつた關帝信仰が漸く支那各地に普及して明末の清朝勃興當時に於ては既に滿洲邊までも、この關帝信仰圈に入つて居たことと今一つ斯うした情勢を馴致した一因として三國志演義の流行とを考へねばならぬと思ふ。この三國志演義は大體に陳壽の三國史を骨子として、之を軍談小說的に演述したもので元の時代に羅貫中の作つたものと傳へられて居るが、其の文章の良い上に內容が面白く而も史實に根柢を置いて居る關係も有つて、明代には上下を通じて愛讀せらるる樣になり、明の宮中には四書・五經・通鑑等の書籍と共に、皇帝必讀の書として立派な內府の刻版が有つたと傳へられて居るがこの風は明末には滿洲へも波及したものの樣で禮親王の嘯亭雜錄によると、清の太宗の時にはあの滿洲文字學者として有名な達海が早くも其の滿文飜譯を試みたものの樣でまた聖武記を見ると世祖の時には既に立派な滿文の飜譯書が出來て居たものの樣であるが清初に於ては其の軍法を一にこの三國志演義に取つて居たと云ふ說さへもある位である。

斯うした關係から清朝時代の關帝信仰は、非常に盛況を極めて關帝廟の氾濫期を將來したのであるが、之と共にこの信仰が一般の民衆にも滲透して、單に之を武神としてのみ崇尊する爲政者の信仰のみでは滿足出來ず、民衆方面からは幸運や蓄財を掌る財神としての靈感を要求せられて、遂に然うした信仰が生れて來たものの樣である。

現今支那各地に於て財神として祀られて居る神の中には種々特異な神統のものもあるし又これは地方的にも相當な差異を存して居るけれどもそれ等の中で最も多いのは文財神として比干と趙公明とを祀り武財神として關帝を祀るものであらうが而もこの兩財神を上下二段に分つて祀る時には武財神の關帝を上段に文財神を下段に置くと云ふ祭り方をして支那人特有の尙文卑武の氣分を淸算してしまふのが例である。

一體この關帝が何故全く緣故の無い財神として斯くも廣く信仰せられて居るか、之に就いては私共の得心出來る程度に說明して吳れる人が無いが、要するに義を重んじ俠氣に富み、人格高潔で金錢に淡泊であつたと云ふ、あの三國志演義に描出されて居る性格が其のまま民衆に受け容れられて、之を祀り之に祈れば己を空うして顧みない關帝は、之を拜む人々に必ず幸運幸福を下し給ふであらうと云ふ樣な氣持からだと謂はれて居る。

神としての關帝を書けば、其の淸國朝廷との關係だけでも三國志演義以上に面白い部分があらうし、又この神の性格の中には私共日本人の氣持と相通ずるものが多々有るのを覺える。私は斯うした日支兩國人の性格に融合する關帝信仰を、將來兩國人提携の鎹として利用出來はしないものかと考へてゐる。（筆者は北京市公署觀光科事員）

東城記（二）

加藤新吉

北總布胡同といふのは、東單の大街から東へ入る西總布胡同、それに續く東總布胡同を殆ど行き盡して北に折れた胡同である。東西總布胡同は大部分舖裝された長い廣い胡同であり、北總布胡同は泥まみれの小路地である。無風三尺の土、有雨一街の泥、昔なつかし北京の姿を其儘に留めてゐる。だがどんな北京禮讃者でも、風と埃と泥にはほとほと閉口してゐるのだから、昔の姿もあり難い譯ではない。

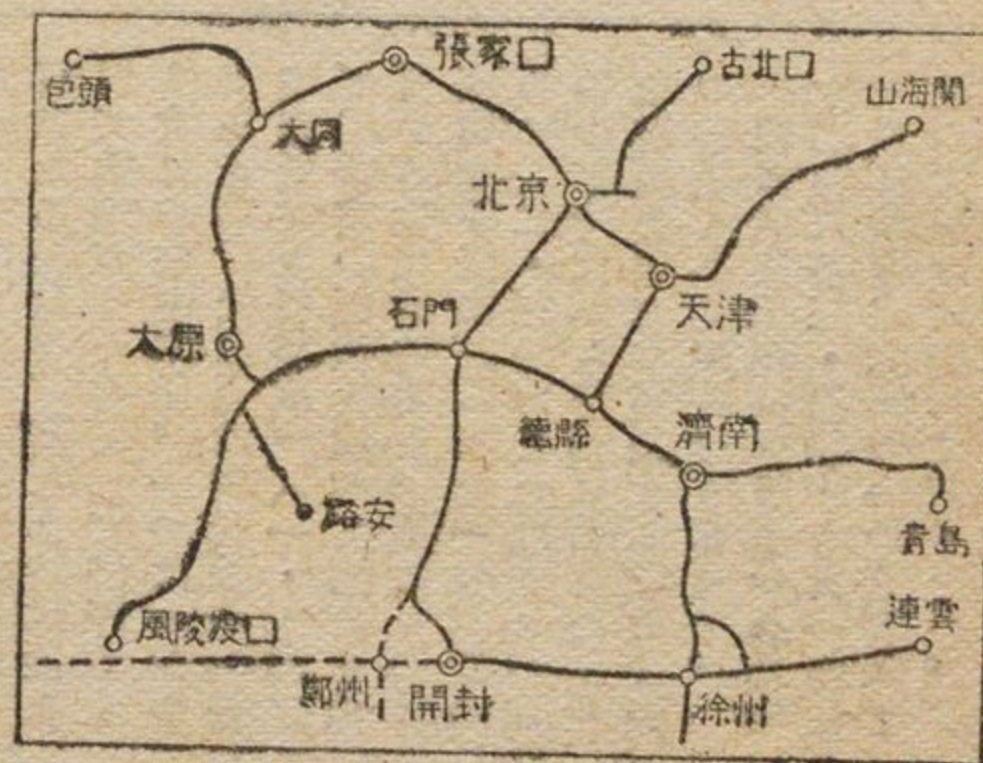
身分のある人は西城にその邸宅を構へる、東城は商人や成金の住む所、と昔は相場がきまつてゐたらしい。昨今はさうでもあるまいが、昔さうだつたらうといふことは、略想像ができる。西城や北城には、どことなく悠り落付いた住宅區の俤がある。前にゐた後門外帽兒胡同の如き、その名が既に大官を意味するといふだけに、大邸宅を圍む長い墻が續いて、古い美しい門が點綴してゐる、といつた感じであつた。それに較べて、東城は墻が短かい。遥に混み合つてゐる。乘馬石をもつた司閽のやうな門は殆ど見られない。

ここらは貧民窟だ、と阿媽はいふ。夏だからでもあり、院子が狹いからでもあらう、子供が胡同に群れる。夜更まで騷ぐ。悉く恐ろしく汚れた裸ん坊である。穢くて喧しくてお行儀が惡くて、と綺麗好きの彼女は吐き出すやうにいふ。車夫も柄が惡くて法外に賃金を吹きかける。東富西貴の語がある由であるが、これでは東貧と改めずばなるまい。さうしたところに近來多數の日本人が割込んできたのである。わたくしもその一人である。

隣組は七戸、十號から十七號迄。但十一號は北京ハウスと稱して數戸の邦人が獨立の隣組を作る。十五號は中國人で組に入らない。七戸の内六戸は華北交通人で、總裁、祕書長、北京驛長北京用品事務所長といつた具合、殘る一戸は傍系の華北車輛會社員、謂はば華北交通部落である。而かも全員舊滿鐵社員で顏馴染といふのだから、常會の夜など話のはずむこと夥しい。

東長安街にある華北交通本社までここから徒歩で三十分、早い俥で十分、俥代三十錢。前の住居から二十數分、五十錢に比して割高である。もつと前のことを云へば、後門から銅貨五十枚（實は小紙幣、十一錢强）であつた。爾來四年、物價も凡四倍强に昇つてゐる。

北京の車夫は、どんな小さな胡同の名でも知つてゐる、多くは文字を解する。だから、行先を正しく書いて見せさへすれば支那語が喋れなくても目的地へ行ける。その點、全く字を知らず又殆ど町の名を知らぬ滿洲の車夫、客が右だ左だと云はねば何處へ行くやら判らぬ新京や奉天の車夫とは違つてゐる。ところが、北總布胡同の名は、北京の、而かも東城の車夫さへもたまに知らないのがゐる。それ程、隅つこの小さな胡同なのである。

隅つこの小さな胡同にも何かの風情はあるものである。東の城壁に近くて夜など城外の蛙の聲が聞える。それはせめてもの取柄である。が、胡同自體の風情は餘りなささうである。目下、なるべくそのよさを見出さうと努めてはゐるが、思ふに、結果は有望ではない。その代り、下層市民の生活風景に就いて、今に見聞記が書けるかも知れない望はある。（筆者・華北交通資業局長）

昭和十七年九月十五日印刷納本
昭和十七年十月一日發行

十月號（毎月一回一日發行）

編輯者 北京・華北交通株式會社資業局 加藤新吉
發行者 東京市麹町區三番町一 長谷川巳之吉
印刷者 東京小石川區久堅町一〇八（東京）（一〇四）共同印刷株式會社 古川一郎
發行所 東京市麹町區三番町一 第一書房 振替東京六四二二三番 電話九段（33）一四一五番 三三四四番

會員登錄番號 一一六五〇八番

一冊定價（特）三十錢（郵送料一錢五厘）
一ヶ年分 金三圓六十錢

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

☆治療の要諦

化膿菌に對して劃期的治効を謳はれてゐるズルホンアミド劑の撰定に當つては其化學的純度高きものを採る事が治療の要諦であります。

☆ポレオン「日染」

ポレオン「日染」は二基ズルホンアミド劑の純正品にして、內服に依り左記諸疾患に對し的確に奏効するのが特徴であります。

適應症

化膿性婦人科疾患
扁桃腺炎・丹毒
中耳炎・齒槽膿瘍
急・慢性淋疾
其他あらゆる化膿性疾患

NISSEN

二基ズルホンアミド純正劑

ポレオン錠「日染」

製造發賣元 日本染料製造株式會社 大阪市此花區春日出町
一手販賣元 株式會社稻畑商店 大阪市南區順慶町二丁目

包裝 二〇錠 一〇〇錠

P—178

NISSEN

砒素驅黴劑

"日染"の新發賣!

今般弊社が完成したサビノールナトリウムは日本藥局方アルゼノベンゾールナトリウムに一致し其の規格に適合然も嚴密なる効力試驗並に臨床試驗を經て發賣す。

時局下眞面目なる醫藥の要望さるゝ折柄自信を以て御薦めし得る「日染」の驅黴劑を御認識賜はり御愛用あらん事を誌上を以て懇願申上げ新發賣の御挨拶に代へる次第であります

一號 二號 三號 四號 五號 六號
各一管入及一〇管入

サビノールナトリウム

製造發賣元 日本染料製造株式會社 大阪市此花區春日出町
一手販賣元 株式會社稻畑商店 大阪市南區順慶町二丁目

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可　昭和十七年九月十五日印刷納本　昭和十七年十月一日發行(毎月一回一日發行)第四十一號

北支　㊪　定價三十錢